

丙子雜俎

四

昭和十一年三月下旬起筆

特別
14
1919
475



176710

丙子雜題

昭和十一年三月下旬起筆

○自今の誕辰と私を中心として只か春概念を聞かぬ
 毎年二月十七日今年も繰下けも三月廿一日に紅毛館
 に開会せしむ。私のもてしるべきを聞かぬも古稀に到りて
 七十七の地獄にありて其の故例に依つての心ある本
 年の七十七回の誕辰に當るのみ今も依例に依りて喜
 壽を祝ふことを標榜しこれに或人と在京者依りて
 席をとりて其の分は但四かきも江戸の杉井もあつた
 井心持も出席し。自今も戒を令のまゝに解かざる
 今日多くの人のいふ宴會を控へて長々たる祝宴



八時を得ぬと断つれば、又「徳」に入らず祝宴をなす
 此令とすのれ。いづも此令より自分から銘々の集ふか
 どを持てをも帰すのが恒例とすのるのむ、此令がハ
 文筆の後はと徳著、早稲田「を飲つた。る女とす」の
 今更の笑聲があつたも、二三の力めを悪書とてかき
 散らして、いんも、飲つた、席上自分の吐きの春舞歌の以来
 の言を云ふれ寸々の隙微意を罹つた、酒と煙をとも
 時瘡、此れ、尚志弱りか、まの後のかす、口即酒の後の
 であるが節煙が出来ぬとす、身養生法と稱せ、小
 乗の衛生の自分の関印する所、大乗の養生法が所
 成、此と説き、まの心の養生法、悠々自適であるを
 語つた、いづも、養生法一人、士流の多く、短汚後をやつた



が、此夜は、彼女が清島の舞踊をやつた度きつたの、皆
 く、あまの行儀も、祝し、笑んだ、節酒の自分の教令
 此より、酒の味が、漸や、ゆるゆる、聊か、あつ
 たので、自分の節酒を承知する、銘々の銘を採
 り、抑録して、此より出度者

- 伊豆村、石塚、大江、乙、大
- 奥田、中、紫、あ、り、ん、か
- 村山、ゆ、い、山、ゆ、い、い
- 村井、新、流、昆、田、苑、二、小、久、は、一
- 小、木、山、三、寺、崎、元、重、坂、上、山、三
- 坂、口、敷、去、房、井、市、次、寺、向、登、美、夫
- 森、脇、美、相

席上余も祝酒を嘗てんとし、醸金を貰つた、而して
休むべきのを幸ひ、**北海**と起き去る。春城金景
紀の成路、柳北の碑の除幕を行んじ、出座者
を募つた。

聖朝(廿二)九時十分の汽船に北海行を發せり、春城
員十名、口行、中、成路、柳北の如く、ある大崎降一と云
山人を誘はせり、二加の山人名古を新々の東京支向
詰り、北海着の上、同海舟を、控へる。道邊の
養を展く、双杯會に未立人を訪せ、**聚樂**あり、
揚く、柳北の碑の聚樂の庭園中、あり、一日柳を
供し、**礼科**の後、**振影**、予生あり、感懐を、一、一、語を
柳北の、大、**地華**家、あり、**家の**、**朝**、**中**、**終**、**り**、**連**、**載**、**し**、**り**。

いづれ漫遊するも、**北海**行を、し、**童**、**き**、**と**、**る**、**と**、**し**、**め**、**る**。
生、**重**、**茶**、**葉**、**の**、**論**、**説**、**を**、**あ**、**と**、**り**、**し**、**て**、**童**、**き**、**と**、**る**、**た**、**り**、**漫**、**遊**、**す**。
り、**し**、**あ**、**る**、**美**、**多**、**の**、**若**、**者**、**あり**、**四**、**つ**、**花**、**日**、**の**、**後**、**を**、**菊**、**と**、**な**、
る、**り**、**曰**、**く**、**柳**、**格**、**に**、**法**、**の**、**京**、**格**、**一**、**斑**、**を**、**い**、**つ**、**る**、**皆**、**を**、**地**、**華**、**の**、**見**、
る、**あ**、**へ**、**き**、**と**、**あ**、**る**、**し**、**地**、**華**、**を**、**以**、**つ**、**て**、**而**、**時**、**名**、**を**、**以**、**つ**、**て**、
り、**あ**、**る**、**あ**、**る**、**才**、**一**、**推**、**さ**、**つ**、**つ**、**を**、**得**、**ず**、**自**、**分**、**の**、**あ**、**る**、**私**、**説**、
を、**あ**、**る**、**地**、**華**、**と**、**若**、**し**、**た**、**る**、**あ**、**る**、**或**、**を**、**い**、**つ**、**て**、**地**、**華**、**を**、**家**、
と、**し**、**て**、**お**、**も**、**を**、**考**、**へ**、**る**、**事**、**も**、**あ**、**る**、**し**、**也**、**思**、**へ**、**た**、**あ**、**る**、**地**、**華**、
家、**と**、**し**、**て**、**平**、**昔**、**の**、**先**、**輩**、**も**、**こ**、**自**、**分**、**の**、**遠**、**く**、**あ**、**る**、**處**、**の**、
や、**る**、**事**、**も**、**愧**、**つ**、**と**、**二**、**人**、**の**、**あ**、**る**、**碑**、**而**、**刻**、**し**、**た**、**る**、**者**、**信**、**こ**、
射、**し**、**た**、**所**、**國**、**の**、**あ**、**る**、**地**、**華**、**の**、**大**、**島**、**降**、**一**、**と**、**行**、**て**、**流**、**つ**、**て**、
成、**路**、**家**、**の**、**あ**、**る**、**日**、**流**、**或**、**十**、**冊**、**或**、**人**、**を**、**強**、**時**、**に**、**到**、**る**、**事**、**也**、

知れども今も存すること少く、又家の祝儀も
長田秋清と自合が親交ありしことも詠歌に上つた。聚
米の秋葉の吐き、やのを後にも手身と唱へて、階上
に數十人を入り、秋葉の言のふも、初めし一境す
ゆ京の院中一老人と曰ふ、昔の秋葉の伝へるも、此人
官武外骨と云ふに、五十年前耳するも、若るんぞ初め
過る人多く、釣竿を折る屋敷、此人年七十七と云
いふくの誤謬、余も釣りこまぬ、志きらぬ後を交へ
二時分の車中、幸ひ無聊を消すを得たり。外骨の
余の秋の詠を、在社中、日々昔の西洋文豪の逸話を
評載し、外骨の言のふも、採つて自家の滑稽を
詠に、ぬめたり。或る日一尚、俳諧の机と、夜茶

東京製

の、秋の文界の命、盗官外骨と云ふの、彼人の
余の余の文を、無名に、ぬ録し、りれを、風し、漱し、一尚と
余の余の言、也、然るも、平年の、沈性、属、車中の、流、次
此の、余の、言、外骨の、脚、中、忘、ん、余、余の、言、し
て、秋葉の、態度、を、し、外骨、一、行、地、葉、家、も、余
ハ、余の、葉、の、言、材料の、演、説、の、趣、を、忘、り、(三月廿三
日記)
○秋葉の秋葉社、が、七、つ、い、秋、葉、関係の、文献、を、来、月、初、旬
神田の、古、書店、と、東京、の、秋、葉、の、陳、列、場、に、陳、列、候、説、書、を、い
く、く、と、し、自、合、の、秋、葉、を、借、り、来、れ。去、年、七、回、し、社、が
同、じ、こ、も、や、つ、れ、こ、も、あ、る、昔、時、七、世、の、中、に、結、ぶ、秋、葉、一
式、の、秋、葉、紙、也、他、を、出、し、た、こ、も、あ、る、が、此、が、此、秋、の

よと受印し此後何れ家々無いのを断られ、絶て日云
ふから、俾うま左の六點を修し其くた。

西南戦争中後報録

この当時連行中ぬかまうに男音前島
の手で新譯しル電行が悉く官文書である。
太政官の界紙、電信日文を字しルよりや電
信其候のそや、暗罪を譯し此よりまかあ
つる枚數百と述び、戦多日りの撰換を執
し此より、前島男の友故中へあつたのを借
入の籍(男の遺)とをの冊子として保存
し此よりある。

心算申入文 三通



此の心算文ハ自分か後長路々の主筆時
代井上毅と陸軍省を社く定むれり
び井上の心二可共、後長路の論文ハ
井上が自分の身事、聞て誤報を傳
へ此をヤウキとすつて事ハ無根と叙れら
び、一ハ大根差の門戸に趨つれと云ふこと
又聞し一ハ当時漢紙上の豪華物かた
リと述し、而世有力者、送るを青いれ其記事
ヲ謔りがあることを指摘れしもの、あると氣
ずいぬの井上ハ長くと文をやり、其文を指
斷寧ろ幾ヶ所も塗抹行正し、井上其人
の性格をあらわし、此よりある、他の陸羯

南の一画の○○の氏の若め辨疏したるを
今も美の誰んの者かあるに忘るれば種自
今と書田宛かある、蜀南の日本録の三巻
に南時文名の書かつたものがある

福池橋痴居士伏階論評書問

この居士が晚年角田林冷屋居士一輩
の伏階棟間紙を讀みか一と論評したるは美
濃紙界紙敷にこころの頌の書文がある、
福池の伏階の門の漢を多く又著るは
七と五抱ある負けぬ氣を紙評を試み
よむ、居士の伏階評の北の二作の無
い、此書問が角田から書きたる轉



送る、自今仁葉の貴人の受はれよ
七

岸田吟香月漱梅溪詩書帖

えの吟香が梅溪に遊んか其の景色を十
二枚に寄し、吟香がえのの意
を法くし、梅と香の歌も数行前將
ふれよがある

三夫人遺墨

一軸

この福池橋痴が和妓のえの自ら書
を執つて書時備名垣魯文の給入行
文の正誤を申入る、紙の十二行
畧紙の細書、えのの書、梅の書、

おとんとそのふとある。或る時軍家があの
 此及故を予する人柳北翁と書又この
 七添へ目がきと他ら七、目まんと合いせし
 悔とししとあるが、柳北の狂歌を録
 して福池も千ヤカしてある。往年北翁が
 自分の年々悔しむ決意書に云く七遠近の
 三才人遠近と題してある

遠近史料一冊

この柳北の子信世が祖父の忌辰に人々
 つとを居士の及故類を集めてエロクイブ版
 三冊にしてある。其首の居士の著る成心
 任のあり、千紙や日誌の断片や書信を



自分の筆やりの存するもの此の自分の書目
 中書部と華福と羅の行程の刑と福の時を
 ね書目批判所の判決文が数通ある(さき)
 ○今件ハ一か突氏一荷を添うる五万圓の金と
 此。未食の今件ハ折の金のあるは、彼んが
 此と書名標本を早稲田の買上を多るは、
 金七書名田か其の内金か、千入りの結果
 ハ割あきめてある。自分の十三四年後
 入債し進つて、今件ハ○今件を録し
 和ハ七時々の信信をひて、皆る自分が
 難しれたこと、今

奥深く夏の見ゆや春のそよ風を
 時計をよむとど留守とて茶の香 えんぎ
 稲刈りも 遠か茶店もあはれ
 道傍の赤のまんまの種こま
 夕露の野かほを福の村
 から埋めの蓋あかり花のりり
 砂漠に住むに泥迷い春の雨
 北へ入りのと福を創る人
 自合かぬあふも 自合か 觸んぬ 同感のまじり
 早き 眼
 ツイ先に猫をサカシふつき深更庭前がやまもいかつれが、恋
 ひとこころと想ひの外、天下晴れてあふふやのまじり



まるく成るよのいやざり或るまの感し人河のあの子
 とせくと極めを錯綜して感得か起る、俗に、老子の猫
 の恋の句を見せ二三を抄す
 春の蓋の猫利あるをい通ひけり
 千とあけてあは推しはや猫の夫
 恋猫に雨にまけあはる春のうら
 恋猫をまらん母みしつとちとあふ
 我店をゆつかにあはる猫の恋
 飼ひ猫のうのん心をにくみけり
 我猫をよもの垣根に足つ口こま
 の西洋の鏡に、毎日に次ぐ良更」と云ふ鏡かあふ
 世の中の日辛酸と世帯の家庭の苦しみ板いれあ

て無^い北の誘の至味がどうもい。北誘を別る言とあび云
ふと東一の無妻あふといは是れ後時を好むといふは良妻
が欲しいといふの妻をもつて困りぬいれ人の言ふこととある
が實は世間の妻を持つて久かしたる者が多いこととある
うか、妻のあつても無妻かといふといふ人間の志も大かま
ことを思ふといふこととある。何れも得^るべきに良妻のたとい
ふといふの妻が良人を困らせる悪妻が多いこととある
うか、良妻といふといふかといふといふ文人が思ふ妻の
こととといふのいふといふ、決して思ふべきを要する
①賢であつても良妻なるを失ひたい。皆た良人をよく理
解するといふ良人②と契り結ばれたといふといふ良妻
たる資格がある。良人を理解するといふ^{こと}を妻子と教へ



導くも世と交るも一家と交るも道徳の道徳といふ
ことを得るが、^①其の賢い良人を識り良人と和する
為めの賢い無けんかといふ、貞淑と兩まする賢い無けん
かといふ、今も所謂賢妻といふのは、性も良人と理想を
異にし、親胞の心を達し、良人を凌ぎ貞操などを輕
毛の如く考へるのを、寧ろ婦人の誘りとするよを賢妻
といふ稱しをのぶといふ、亞米利加のやうの如く、^②跋扈界の悪風
を真似るといふ、外國にいける賢妻の為め、良人が困
人び有妻といふも無妻、是れ持てるひん、^③いふといふ
賢妻といふも良妻といふ所が、日本も進んで北の誘が
至言といふといふ。

○ 北の誘の古き外十二打、^④牝牛が有る、^⑤いふことと

お作り又田中黄太郎の湖大池を渡人が概二重を
 去るも、

○前回は、の双柿会をゆめの時寄した小照をこころぬき
 おく、魚海の取次歩も道通の遺墨と陳列く自
 宅の冬もふもが一般の観望に供しての比、其の陳
 魚海神北碑前



道通墓前



道通書斎前



深田



双柿会
 使回内
 道通未亡
 人と余

別品々皆自分分り不
 と信されぬ、二十数粒
 ろんかぬ、まぶれか
 こころ花とある、その
 か七ハ然七ある、古ハ交

り、おんれ染つたよ、だが、一ヶ所、海到ん兄の、今
 回が初めて、まろん、その折りのことか、思ひ出さん、
 低回を
 り難かつた、朝へて二三日、皆道通の、肉忌に、念を
 持の家、も、色、色、の、高、帖、を、こ、ら、夕、十、フ、形、を、附、れ、の
 を、喜、び、ん、れ、此、の、印、刷、物、を、各、所、に、あ、る、押、書、を、物、を、寄
 せ、集、め、れ、の、心、を、し、生、前、真、つ、こ、乗、り、て、二、帖、に、書、か、ん
 此、ま、う、と、一、冊、に、合、り、し、て、複、写、を、し、れ、よ、う、か、任、真、帖、と

自題してあるが、生前人より示さず家より見ればよか、一内
に際し配り物として問ふ合つた。此帳より画あり和歌
あり、平生愛読の古法もあつて、宛から友人に示さず趣
がある、二十枚程の帳び、解説も附してある。此中
の古画の由を自分記すて定めておくと同じといふか
くつらある、栗山子の三問の如き柿の回、血海海老の
回、雲がまゝがある。尚ほ道遠がある時社に書きし書くと
此の画帳全部を押漉したるもの、此の任真帳を編めれば
いふまでも重複の多いかといふこともある、道遠の書生
の如く画を書いたが、隆世俗風の如くか、小説の下の
を書くと、自在であつた。吾人等の荒れりし時代
道遠をせびつて、吾人の美人を考へせよといふか
あり



新巻も施して主人垢のぬけたもの、あつたが、此の意を
心うやくといふこと、其後隆世と無つたが、道遠の画は隆世落
から入つた書で、四君子をいかに写し、如女に画ひし、誰ん
と教へて、七も、自ら記すといふ、吾人自然、茶か
動けの画とさういふある、晩年を従つた花寺を画したる
景も描いたが、人物を書き、長しとおひ、但し、隆世
の画の今も、隆世俗風を脱した、門人や友人の、氣樂
るといふ、押漉し、此の多くは、自分の心中の人物や
風景を、画し、歌曲のある部を、題して、吾人、
つた。自分の意を、おまねれ、寒山松涛、良
景の、此の、此の、漢詩、
時代相傳、やつた、吾人の、

こと必し古語を採り、任其然とあることの皆古人の
 語の多し、書の大師は秘私淑とあるの域を造り、
 中年頃の書といふ全然、故を異くしてある、俗名の流布
 の境の此より、往々語の困りあることあり、勉年和記
 を採りたる、短冊も亦少くも流布してある、直述の
 筆札の晚年、即ち私淑の意、へん書は其の雅
 の味の餘りたる、是の、自今より古い文法が、其簡の敷方の
 多きと違ひ、大概保つてあるが、其方と此敷くをこそ
 甚しく巧拙を感ずる。昔の形も亦の如くある、今任其
 然と採りたる、直述が、時々の拙意とする、古語の二三と
 採りし、

一 萬殊一記 在頃

萬殊一記

- 一 雲霧千畫、方款于琴
- 一 天道至則及 ワタシ
- 一 智者作法而愚者制為、賢者更禮而不肖者拘焉 荀子
- 一 古今不同、何古之法、帝王不相親、何禮之 循 荀子
- 一 聖人制禮樂、不見制禮樂 淮南子
- 一 法度時變、禮 隨俗化 淮南子
- 一 君子上進、小人下進
- 一 眼到、心到、身到 清江新後書三則
- 一 有當後之者、有當孰後之者、有當為之者、有當再三細看之書、法唐冠後出

かけぬるものと云い込んでゐるが、浮世情もどこの心ゆきの
か懐かぬと云くは、流石をどの位に今の淑堂を待て居
りてゐるか。或は浮世情の描く世に相模ぬのおかある
云い込んでゐる。哥麿の情も上方風がある云い込んでゐる
所がある。或はかゝると云い込んでゐる。之を辨るは、
哥麿の美人そのつとめれから地と云ふが、江戸の流石を
一得する所のものもわづらひ美人を産けれのものか知らぬ。
昔も云い込んでゐる。或は此の理もあることだが、人物の
自れや自れのものや素人か、俗と云ふのが、哥麿のやうな
艶の業を押し出せる人か、或はあつたか、と云ふのは、
みづから思ひ花の流石を押し出せる自分と云い、
優美なるものか、或は、業之が、やうに哥麿の流石と



云ふと、素ら懸る無骨の醜漢が、この男の業を流石と云
くても、美人の美人が、あつたか、と云ふのは、
或は、哥麿の美人の美人、これか、或は、
一派と云ふもの、流石がある、女のエキスプレッションを深刻
な方へ、流石の流石の相違するが、或は、理想の
の、或は、外廻りを日本の流石情を持つて、
あるか、或は、流石情、流石情、流石情、
又、流石情、流石情、流石情、流石情、
花を、或は、流石情、流石情、流石情、
或は、流石情、流石情、流石情、流石情、
流石情、流石情、流石情、流石情、
一程の流石情、流石情、流石情、流石情、

自覚もあつたか、群小画家を罵倒して自虐の文もあるが、晩年
 大岡川の画が、幕府の賞を受け、五十の千鐘の刑を受
 けたり、えんまの考め、晩年の俗話「さくらんぼ」も
 二代丹波の俗と誤ると換をいふこともあつた。相ひあ
 くらう。

○鈴木重胤の経緯歌「恐く大心中の大心
 去る中よ夫の命はあつた。日本開闢の始り
 神代の飛鳥皇祖の威風、歴代の切草、四体の瀬
 浪由来等と詠じ、素の歌ハ十五句の第一巻三が
 終句、素少二年に病五ヶ年の日毎日と長くと
 成るとまふ
 ○おのふ花の物語、本林之この人共之千はりの

おのふ花の物語、本林之この人共之千はりの

紅葉と雙柿と

【下】 春城翁と熱海で清遊

二十二年午前九時東京に集
 合せる春城翁の一行は十時、昨
 夜曾延の宿に未だ醒めやらぬ陽
 氣を載せて熱海温泉に向ふ。



十時五十分熱海着、直ちに
 自願車にて故陣内追善先生の雙
 柿舎に向ふ、兼以て山田清作氏
 の館に於て追善先生未亡人仙
 子刀目、門扉をひらき、庭園を
 掃蕩めて我ら同人を迎へらる。

然の庭をいよく清遊に修築
 し、家屋も翁獨特の雅趣ある
 設計にて増築し、地の利と相
 俟つて眞に難き仙境となつ
 た。

成りては免の筆、人眼を奪ふ
 ものがあつた、所館の池を見晴
 らす廣間に小憩す。

一行中の村山龜齡氏豊饒なる
 一文を寄せらる、これを末尾に
 附するは遺を失すれ共、唯して
 「紅葉と雙柿」といひ、この遊
 の結論として千鈞の重みあれば
 敢て玉稿を借り來つてこの記の
 結語を飾らんとはする。(風何
 生)

昨夜は春雨、曉上をそよぎ、今
 は、潮風、酒杯に入る。一日有
 半の高興、偏に春城翁同人諸君
 の田舎也。此行、命、風何二
 君各々記あり。予は、唯だ、命
 せられて所感數行を綴する而
 已。(寫眞は熱海陣内先生墓前
 に立つ春城翁)

紅葉と雙柿と

村山龜齡

前書は、紅葉館に春城翁の喜
 辭を記し。今朝は、汽車、樹

後述あり

寶永三年丙戌夏余の年三十二より
元文二有丁巳四月十八日陰曆十月二十
後日論よりこと一覽(通)るる
年數の三十三年の間

いんも功ききことき
の表り危し抱しつて友三人の由前告日誌訂成ふは
内道と、尾崎紅糸、寺崎春葉、(貴)商(貴)
此の由故神の由、他の諸君の者中先生師
友の者簡を多く捨出りて數十其こ志甚しき事
今も中よりあるも、此の友故を述べたるは
百も及ぶ所友の者簡を多く捨出りて数十其こ志甚しき事

東京



喜壽の宴

春城會の記(一) 琴條生

市島謙吉先生を饗する春城會は例年先生の御誕生日たる二月十七日に開催する習慣はあつたが本年はその頃丁度總選挙の最中であり、二、三事件等の爲めに遠慮引、去る二十一日に開かれた、本年は先生の鶴壽正に、七十七その實證を兼ねての催しの事としてこの日會する者二十名、春城先生の外曰く伊藤正之助氏、石塚三郎氏、大江乙亥門氏、奥田雲祿氏、中野鑑平氏、紫安新九郎氏、村山駒之助氏、村山龜藏氏、山田清作氏、松井源次氏、昆田強平氏、小久江成一氏、小林堅三氏、寺島元重氏、坂上弘藏氏、平野登美夫氏、森脇美樹氏、坂口献吉氏、廣井重次氏

等、常連の松木弘氏、關太郎氏は都合のため遺憾乍ら不參であつた。場所は東京の芝の紅葉館、先生は

頭だん(快方に向つたので少しづつ、やつて居る、どうも絶對に止めるといふ事はよくない様である酒は二週間許り煙草は七十日間許りで禁をいた

が欲しいとか高位高官を望むと云ふ様な大それた考へは健康上最も悪い結果をもたらすものである
と、人間は憂ひ事が最も身体に降るものであり中にも借金が一番こたへるものであると説き、先生は常に「自分の身心に聞いて見て、何でも無い無理でない事をして居る、何事でも成り行きに任すと云ふ様な楽な氣持ちで居る、是か何よりの養生法である還暦から既に十七年
長生きを する事は不快では無いが、どこまでも生きよう等とは思ふて居ない、先づ借金が出来ぬやうになつたらそれを境として終焉を告げたい」と極めて含蓄ある大乗的健法の一席と謝辭があつて更に酒間紫安新九郎氏大江乙亥門氏の市島氏が論議隨筆界に於ける國寶的存在なる所以と、先生の長壽を祈る祝辭演説があり名物紅葉館主人の羽衣の踊を見ながら歌謡時の移るを知らず、盛會を極めた(寫眞は紅葉館に於ける記念撮影)

北城新聞三月所載

中も既に先の三二友の巻縁を忍びて世に漢の事
ことしれた。書(通)の二(百)もア二ハムに於りこゝに
こゝにあらず、をびえおし、なると予か、けは、多、養、こ
後、そ、け、り、た、社、中、の、こ、よ、も、目、も、ま、き、の、道、
途、の、書、跡、也、此、の、こ、よ、も、山、田、書、迹、(一、二)の、没、後、其、
迹、を、印、創、す、ま、ま、の、こ、よ、も、此、の、書、迹、を、也、也、こ、よ、も、こ、よ、も、
時、と、其、書、迹、や、余、の、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
拍、載、と、お、の、なる、時、の、こ、よ、や、也、也、也、也、也、也、也、也、
の、書、迹、を、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、
あ、ま、い、ん、の、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
字、を、こ、よ、も、長、み、の、書、迹、也、余、の、け、け、け、け、け、け、
帯、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

とする時のお状(即ち信)に、(説記借説)の
の書(通)も山人の書(通)也、他、の、書、迹、を、こ、よ、も、
い、の、こ、よ、も、上、回、の、書、迹、也、也、也、也、也、也、也、也、
ある。唐書(通)の、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
日、松、木、を、画、し、て、近、刻、の、印、を、繪、し、て、示、し、た、こ、よ、も、マ、ジ、
こ、よ、も、の、書、迹、を、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、
あ、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
或、の、書、迹、を、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、
ん、の、書、迹、を、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、
唐、書、迹、を、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、
又、唐、書、迹、を、こ、よ、も、こ、よ、も、こ、よ、も、
○支那書推考の山刊書目録と字の考を、こ、よ、も、こ、よ、も、

三月三十日

舞臺劇

熊本城の清正
中村吉右衛門 一座
澤村宗十郎

(吉田松二郎作)

加藤肥後守清正 中村吉右衛門
清正奥方三葉 中村時藏
同子息能之助 坂東又太郎
同熊若 市川男女丸
同千代丸 市川たかし
同渡平次 市川九藏
同堀平次 中村吉之丞
庄林準人 中村七三郎
兵衛三左衛門 市川團次助
福田九郎太夫 市川染五郎
佐藤治右衛門 中村吉之進
木村早苗之助 中村又右衛門
西築千之助 中村正太郎
遠矢兵左衛門 中村吉兵衛
森作右衛門 中村藤好
美須彌次右衛門 中村吉六
井上大九郎 市川門三郎
小姓團藤三助 澤村田之助
板倉の五太田三 澤村千鳥
板倉伊賀守 澤村宗十郎
其他 清正の家臣及板倉の家臣
大勢

家康と秀頼との一隊の會見を無事に済ませて一重荷としての歸國の途、船中で悪病に罹つた加藤清正の容態ははかばかしくなると、へ不吉の傳へある神文の鑑、城中の失食に安置せよとの命があつた。豊川幕府から見て清正は目の上のくぶであり、清正自身もその事を充分知つてゐたので、幕府が病疑眼をもつて清正の行動を監視し、こも乗せられぬやうに人一倍努め、如何なる犠牲を拂つても妙君を頼り守り立てる決心だつた。密偵渡邊民部から清正の病重しと聞い、幕府は密偵を探らせるため伊賀守を使つたところ、重慶の密の清正は勇、感然たる有様、大御所口上たる秀頼を大阪城以外の地に移す件を自分に任せられ、秀頼退去と同時に將軍の公達の一方を清正に預けられたとの決然たる返

答である。伊賀守は清正の病體に打たれた心地して立歸つた。一先づ伊賀守を歸したものを、刻々と迫つてくる死闘を見つめながら、落目にまへく大阪の運命を思ふと、清正の胸はかきむしられた。
清正は小姓南條三郎助の面ざしが秀頼に似あつてゐるのをせめても幼君に見立て、血涙とともに懐しき、靡えしき、苦衷の心を述べ伊賀守への苦肉の策とはいへ、大御所のあさましい企に同意するか

和鏡針箱門
具衣柙店
和久井商會
高田市本町四丁目
電話二二五番

かかゝ一層痛切であ
る家康が秀頼を
大坂城へ地へ移さ
んとすを伊賀守も
でき、家康の子を人
所へ寄附せよと云ふ
所、清正の面目躍如
たるものがある。自分
の地倉加藤と比し
此の別が或倍の優
んとするのん感心
れ、去右工門も上出来

標準劇

自伝

自分もモーパッサンの小説中仲間ニスの僧が鐘とを藉りて
喜怒哀楽を海をこぼれにこぼれと思ひつれが、此の脚
本中の鐘の中は、此の鐘は武田氏の「東」に
傳つた。この鐘を、撃つては、鐘が亡びると云ふ。此不
夫の鐘は、清正の鐘と云ふ。此の鐘を、撃つては、清正の
我々の鐘は、此の鐘も切れる。此の鐘も切れる。此の鐘も
は、清正の鐘と云ふ。此の鐘を、撃つては、鐘が亡びると云ふ。此不
夫の鐘は、清正の鐘と云ふ。此の鐘を、撃つては、清正の

四月一日記

○時を森本意渡デーと云ふ。本多村の六連かうじ
て清正の鐘の音を聞く。自分も樹木や木林の音を
意味を有して、森本や樹木の音を聞く。清正の鐘の音を

云ふこともあつて、森林荒く、樹木のり、神社があるのが
七あらうが、在始時代の邦人目の住するに、後の光景の
神社境内の光景より、思はん、在始時代の日本は、
可なりきやうに思はん、在始時代の日本は、
深い森林が、到る處に、あつた、
厚生の道が、開けられ、
初頃の大森林が、
日産の、
後、
林ある、
い、
影を、



人文が漸やく開けて、人間が耕地を、
樹を伐り、
けり、
伐り、
する、
亦、
さ、
の、
回、
こ、
と、
七、

莫大のふるふるに樹を剪ておるくまの糸のこころ
すはし行いれど、まじい種、御物が出来てもみまふ。木材から
砂糖もぬき、今も物を生れ、法もあるが、樹木も枯れ、
まの心き時、未だぬき、いくらあつても樹が足りぬ、
化音的の樹木を起すこと、まじい工、
ふんいあつて、日本に引渡すに樹木、
のびやれ、樹を濫奪し、一時の用を足す、
い箱を木の代り、
ツチを濫奪し、
樹木が足りぬからと、
あるは用するに、
ハ、前途、

まの、
千入、
十里、
を起す、
か、
二、
か、
日本、
五年、
い、

回春の治あるに或るは天の功の上つてあるが何れもこの世に
 仕つて福深と徳たまひのふいふがふいふ國にがすまふ。
 日本のお國かよ入つてくこと、勢の平は國をさるるは其の
 つらふことよが日本が蓬萊島の面目とまふし保つてあるの
 は時秋にがまひの地をあるは成りゆきまふこと、年毎に到るを
 此の天地とまふと、帝のまふし、樹木や木がいつの間に
 が奥とまふとまふこと、智ること、人に補給のたふし、國の削け
 行く一現象に、近視眼連つて長にゆけぬは、まふし、要
 らへきことか、此の解の後ろに落んかみること、想にまふ
 こと、此、本をむつて、士の内なるを久方振るつて、まふし、
 此、まふし、得す、自らの所感に記してまふし、(四月三〇)

○向崎の三圍境の川柳六世の句碑がある。その句は
しんまゝとらふのちいさるる句あり

と云ふが利しと云ふ。この三圍は徳田の句碑の
どろか利ちまゝの句、辛味清めはつまらぬ句のこと
むかひが、むかひしく味つるること、今世の句の
句にある。世の中の粒々のことを無去識と云ふは
何れもつまらんやうに思ふにせよ。實の物につま
ることつまらんと云ふのは人の心の働きの凡人の
つまらんと云ふことが識あるは感心せぬことはいふ
もある。飯味を調するは感心せぬことはいふ
過へんのが通例だが、滋味を解するは人の由つて

甚しく面白味を覚へることか。人の世の面白味は
皆あるまい人か。つまらぬことか。つまらぬことか。
も、女の食う國人の句もある。このことか。つまらぬ
ことか。つまらぬことか。つまらぬことか。つまらぬことか。
句にある。つまらぬことか。つまらぬことか。つまらぬことか。

○三圍の福寿を川柳の題材とするは、向崎の三
圍の句もある。此の句を採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。
この句を採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。
其角の句の句碑がある。其角の句が何を採らぬ。
この句を採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。
と云ふ句は、勿論、浮山女と云ふ句もあるが、其角の句を
採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。この句を採らぬ。

迷惑をしい例から○いあるさまんまあはむいせあ

三圍の手柄不賣ハ二合さげ

米屋から多く米價が二合下の比とまふ日持たあ

あいつくにあが其角かを米屋共

かく米屋の其角を買倒してわふ、米屋ばりむら

を合とまの二群もまをい

其角の向ちをいばり悪くい

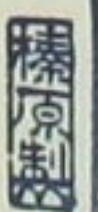
米の關係から花前方面の才子か減つたとそのお

い

才子の花前の才子五人減

他に若侍もよる丸のや乾物をいふ流世らむい

梅干や干瓜の野産其角す



梅干干瓜と中の御大駱

飛人比西地と丸師の困つて

○此夜を精者組と称けり早大の校友入り久方振り
馳いえに、此の卒業式は各科の卒業生二千六
百餘人、校友も多し四萬六千餘人に上り、遊樂場
遊園地、演劇院演説堂七十名、こんど号死關係の
卒業生も合すと八十一名、衆議院演説堂の五分
の一を占むることあり。此年四月は北四月に
一年間の校友死亡者、三百九十餘名、こんど東
部の大勢が、一日の者も起ると、黙禮を志した
前夜と得ることも、現上科も数名あり、ま

と九郎くゝ今の客と一比早大校友も今い様然り大
國体がある。

口昔しちつた不思池畔の山公茶屋を川柳の工人も
皮肉くもする

池の名とおもふ客の来るところ

不思の茶屋が思んだことをいふ

顔二つ池をいといて暢くかえ

蓮塘と顔又いふせしむりま

蓮餅の五つ月まつて腹が張る

極く蓮の花見のおもしろさ

此世から一ツけろすの茶屋を借り

出合するところを白鳥のうら見



山公茶屋の危い首が二ツ来

池ら二平の布うまい奥家

其間茶室のまじきと因茂叔

汚泥に染まぬ花をえんを義事

勅多の意いうあが錦代の因をまへに家の美が後

書抄のまうらうのちめる因縁だが自分かあひく此者

形ふつけひんつれ頭をさきさの格子の七存いこみれ

今川柳を尋ねるると左のぬきこころか

月付いを出しそらえ世勅多の

法橋を弾いてあさころを勅多の

素見う錦代の因の怪あえ

勅多の歌をまうらうて幾をつ

此の筆を座敷の入口に紅霞山
 初音屋のりや扱いはうの馬の
 親方を養うの思ふと初音屋
 夢ををいづくの初音屋の下程

紅霞

自分の書齋を兼ねた坐敷の入口に紅霞山
 房の四字額をかけて居る。これは故人とな
 った濱村藏六が揮毫した篆字額である。私
 の平生を知る或人が訪ひ來つた時、此額を
 見て如何さまこれは酒客の看板だと云ふか
 ら、おかしなことを云ふと聞き咎めた所、
 紅霞は酒の異名だと云ふたので、自分も始
 めて之れを知つた。實は紅霞は印の異名で
 あるので、自分が印を多く蒐集した際、そ
 れを堂號にしたのであるが、酒にも通する
 名であれば尚ほ更によしと自分は一笑し
 た。

線美

同じく線であつて味のあるのと無いのが
 ある。味のあるのが藝術線で否らざるのが
 凡線である。轆轤で作つた器物は立派な圓
 形だが、整形ではあるがウマ味が無い。名
 人が轆轤を藉らず、手づくねで作つた器物
 は整形ではないが、其の線に何んとも云ひ
 難い味がある。畢竟線に作家の精神が打ち
 込んであるからそれが活きてゐる。作家は

ある時の感興で或る線を作り出すので、之
 れを再び繰り返す事の出来ない線である。
 茶人の重んずる線は斯様なものである。我
 邦では書に於ても畫に於ても線が藝術的の
 ものとされてゐる。乃ち平假名などは線の
 さまぐの姿を現はしたもので、そのすら
 くくと連なるさま、其の墨色の或は濃く或
 は淡く、字が或は大きく或は小さく、長く
 短かく錯綜の間に趣をなす所に線の趣があ
 る。道風や貫之や公任や行成の作る線が何
 故持難されるかと云へばそれは藝術的であ
 るからである。僅かに一本の線、豎にし
 る、横にしる、それを引くだけで筆者の巧
 拙が判ぜらるゝと云ふ迄に、線が生きてあ
 るのだ。繪畫界でよく聞くことだが、「あの
 人はよい線の持主だ」など、云ふ、これは
 外國には無いことである。日本畫の根本は
 線にあるので、線が軟かで無ければ哥麿の
 美人繪が出来ない。線のウマ味が畫の七八
 分の成功を収めるものである、渡邊華山の
 線は強烈なもので多くの畫家が模倣を試み
 て、いつも其の及ばないことに驚歎する。

兎角西洋の線は機械的で亦幾何學的である
 から整正はあつても、ウマ味が無い。骨ボ
 グつて肉がない、膩氣が缺けてシナやかさ
 がない。グレースフルの處がないのが西洋
 の線の缺點であらう。我邦の能や舞踊が、
 西洋のに較べて情緒のあるのも、必竟線が
 藝術的であるからのことだ。

俳人の洋行

俳人高濱虚子が外國へ漫遊するので出發
 前のラヂオ放送を聴くと、我邦の俳句は日
 本特有のものであることを、自から外國の
 物に接し、又外國詩人の作にも觸れて感得
 したい爲めとあつて……現在外國に行はれ
 てる短詩形のもを日本俳句だなど云ふ
 てるるが抵ね然らずと評した。外國では我
 邦の如く四季さまぐの氣候がなく、亦そ
 の折々の風物や禽蟲もないから、季節をあ
 らはす詩を作ることは出来ないかと云ふた。
 虚子がどんな研究を遂げて歸るか他日に徴
 する外無いが、萬里の天涯で日本俳句を宣
 傳することも一興であらう。尾崎紅葉など
 は獨乙に巖谷小波が掛けてゐた時、しき

るが、成嶋柳北翁を記念する何物もない。實は熱海の蒙昧期に好んで彼地に遊び、其都度新聞や雑誌に此地の風光美や温泉美を宣傳した人は翁其人で、熱海開創の第一の

莊の句だが、よく實際を穿つてゐる。寺は絶景の處にあるが、僧達の風流氣が微塵もなく、絶景區に居りながら無神經に日を送り、アタラ絶景を閑却してゐる。然るに却つて百里節を曳いて此の區を訪ふものが多く、絶景もそれが爲め徒爾でない。エマーソンの語であつたか、「風景を眞に愛するものが其風景區の所有者である」と云ふたが、如何にも風景區は往訪の觀賞客の領土であると云ふ方が本當であらう。愛の無い所に實は眞の領有は無い。寺に限らず多くの風景區はすべて觀賞客の共有である。風月に對する領有權は愛する者が掌握するので、必らずしも登記の手續を要するものでない。昔し支那の著名な文人は、名畫を購はんとして其價を拂ふことが出來ず、詩を賦して愛惜の情を寄せ、それで領有を満たした心地となりて喜んだものがある。風景に對する領有も又これと同様である。

のには限筆家としての柳北翁であつた。翁は才筆を以つて當時に鳴つたが、明治初年に於ける隨筆家は何んと云ふても此人を第一に推さざるを得ない。當時大新聞の間に伍して朝野新聞を重からしめたものは、末

山伏の創祖ではない。小角の事蹟が顯著であるため之れを創祖と考へるものもあるやうだ。全體此の宗教は普通修驗道と云はれ、或は雜宗と稱せられてゐるが、如何にも雜駁のもので、密教の思想が取り入れてある外に、我國固有の神祇信仰支那の道教思想が打混じたもので、全く日本に創造された新宗教である。此の宗教はよく日本の好尚に應ずるやうに工風されたとも云ひ得る、其の雜駁であるのも畢竟日本にアダプトするやうにしたからでもあらう。日本は山國であるから山嶽思想がある。山嶽に親しむ考もあり又山嶽を神聖視する。俗界に超越した無上の清淨地は山嶽と信ぜられ、神佛の爲めの好適地とされ、支那の神仙思想も参加し、深山幽谷に仙人が居ると信ぜられ峻山高嶺道なき所を行くのが心身の鍛鍊の法とされ、飛瀑に打たる、荒行を

に占領軍の士官が、徒然を慰める爲めある夜佛の娼婦數名を召して酒宴を斡旋させた時一人の士官が粗暴の言動をなしたことが娼婦の敵愾心を鼓舞して士官が刺殺され、其の娼婦は遁れて身を教會に隠したが、占領軍は怒つて百方搜索したけれども、其女を捕へ得なかつた。扱て刺された士官の遺骸を教會で葬るにつき、若し此場合に於ても教會が鐘を鳴らすことを拒むに於ては、それを理由として禮拜堂を破壊すべしと内々意を決して葬儀を營むと、教會では注文を待たず盛んに鐘を打鳴らしたと云ふのが此短篇小説の筋である。面白い筋と云ふでもないが、彈壓下にあつて悶々の情に堪へない佛蘭西僧が、鐘を藉りて喜怒哀の情を漏した所に興味がある。即ち前に鐘を鳴さなかつたのは憤怒の表徴で後に鳴らしたのは敵の不幸を慶んだのであるが、私は此の皮肉の脚色を面白く感じた。因みに遁れた娼婦は鐘樓の中に潜み、亂平らぎ無事舊處に歸つたが、此の愛國行爲が評判となつて

りに滯獨中俳諧で大氣焔を揚げよと勧め、吾れ若し外國に在らば到る處大理石の句碑を建て芭蕉に倣ふべきにと云ふたが、それ

いことを愧ぢざるを得ないと云ふのが當日碑に對しての私の所感であつた。此碑が成つて遺憾に思ふたのは、折角逍遙君の案に従つて出來た此碑を君が見ることもなく鬼藉に入つたことである。

の心身共に超人は違ひない。私に對しては左なくば後世までも拓けずに残つたであらうものが拓けた、これを思ふと今日登山を遊戯としてゐるものは、先輩の勞苦に思ひ到り、修驗者の爲めに盛んな祭典を行ふことがあつてもよいと思ふ、未だ斯る企てを聞かないから、私は之を提唱する。

喜怒を鐘に托す

私は鐘聲に興味を感じて聊か書いたこともあるが、西洋の鐘で興味のあることがないかと、考へてゐる内、モーパッサンの短篇小説を讀んで、僅かに一つを得た。佛蘭西が填軍の爲め敗れ、或る地點が敵の爲めに占領されて、その地にある佛國の教會の禮拜堂が鐘を鳴さなくなつた。それが不便でもあるので、占領軍が種々鐘を鳴らせと交渉したが何んとしても應じなかつた。然る

恩人は此人であるのに、今は全く忘れられてゐる。翁が熱海に遊ぶ毎に宿つた旅舎は今の聚樂で、其頃は前代の樋口屋であつた。自分も長い間此旅舎が定宿であるので時々翁を憶ひ出し、或る時坪内逍遙氏と話次柳北の爲め切めて此の旅舎の庭内に一小碑を建て、柳北を記念してはと目論んだこともあつた。それは十數年前のことであつたが、昨年逍遙君が重患に罹つてゐた際、偶然吾等同人が十數人聚樂に會し、席上私から一同の賛成を得て建碑を發起すると、最も喜んだのは聚樂の主人で、聚樂が何もかも擔當して工事はズン／＼進み、茲に建碑の功を竣つたのは、昨年十二月で、吾等發起人は三月廿二日除幕の式に臨んだ。碑は逍遙君と嘗て語り合つた案に基づき、碑の上部に翁の面貌を刻し、其下に拙筆で「成嶋柳北翁」の五字を署し、背面には翁の熱海の詠歌を刻した。出來て見れば案外堂々たる趣があり、聚樂の庭内に一風致を添へ

つも佛僧が深山峻嶺を平地の如く往來した

修驗祭

廣鐵腸の社論よりも翁の毎日の短篇漫筆であつた。あの人は硬軟あらゆる文體をよくし、滑稽の間に諷刺を寓して常に世を警醒したので、柳北の戯文は一世を風靡する概があつた。翁の著述は曰く柳橋新誌、曰く京猫一斑、共に漢文體の戯文で吾等は漫然當時之れを愛讀したが、實は皆隨筆に外ならない。翁が毎日新聞に書いた漫言も隨筆であるし、人の爲めに書いた多くの文も亦隨筆とすべきものである。そして尤も隨筆の體を備へた大部のものは花月新誌で、これは雑誌として刊行されたものだが、翁の詩でも和歌でも紀行でも翁の交友の詩文でも皆これに收めてあつて、事實翁の隨筆と見るべきものである。當時堅くしい漢文系の文章家はいろ／＼あつたが、艶麗にして而かも氣品を保ち、大衆に投ずる文章はと云へば翁が專賣であつた。翁は確かに明治初期の第一の隨筆家であつたことを今シこゝと感ずる。自分などは、翁に私淑し

始め、猛獸と闘ひ、雷雨を凌ぐことが心身を鍊ることに利用された。末世の僧侶が聞くだけでも戦慄するほどのことを實踐躬行

りに滯獨中俳諧で大氣焔を揚げよと勸め、吾れ若し外國に在らば到る處大理石の句碑を建て芭蕉に倣ふべきにと云ふたが、それは空威張であつた。今度の虚子の行には、大理石の句碑を建ずとも、切めて外國詩人に日本俳諧の眞味を理解せしめて歸つて貰らいたいと冀望する。

風月の領有權

「好風景の處に俗僧多し」と云ふは廣瀬旭莊の句だが、よく實際を穿つてゐる。大概寺は絶景の處にあるが、僧達の風流氣が微塵もなく、絶景區に居りながら無神經に日を送り、アタラ絶景を閑却してゐる。然るに却つて百里節を曳いて此の區を訪ふものが多く、絶景もそれが爲め徒爾でない。エマーソンの語であつたか、「風景を眞に愛するものが其風景區の所有者である」と云ふたが、如何にも風景區は往訪の觀賞客の領土であると云ふ方が本當であらう。愛の無い所に實は眞の領有は無い。寺に限らず多くの風景區はすべて觀賞客の共有である。風月に對する領有權は愛する者が掌握するので、必らずしも登記の手續を要するものでない。昔し支那の著名な文人は、名畫を購はんとして其價を拂ふことが出來ず、詩を賦して愛惜の情を寄せ、それで領有を満たした心地となりて喜んだものがある。風景に對する領有も又これと同様である。

修験祭

我邦の交通歴史を考へる時に、吾等はいつも佛僧が深山峻嶺を平地の如く往來したことや、寺を建るに未拓の地を搜がしたことや、道なき所に道をつけ、橋なき所に橋を架した勞苦に想ひ到らざるを得ない。僧侶の内にも山伏と唱へるものが、殊に山野開拓、道路開通に功があつたと云はれ、其の代表者として役小角がいつもうたはれるが、小角は實際山嶽開拓者であるけれども、山伏の創祖ではない。小角の事蹟が顯著であるため之れを創祖と考へるものもあるやうだ。全體此の宗教は普通修験道と云はれ、或は雜宗と稱せられてゐるが、如何にも雜駁のもので、密教の思想が取り入れてある外に、我國固有の神祇信仰支那の道教思想が打混じたもので、全く日本に創造された新宗教である。此の宗教はよく日本の好尚に應ずるやうに工風されたとも云ひ得る。其の雜駁であるのも畢竟日本にアダプトするやうにしたからであらう。日本は山國であるから山嶽思想がある。山嶽に親しむ考もあり又山嶽を神聖視もする。俗界に超越した無上の清淨地は山嶽と信ぜられ、神佛の爲めの好適地とされ、支那の神仙思想も参加し、深山幽谷に仙人が居ると信ぜられ峻山高嶺道なき所を行くのが心身の鍛鍊の法とされ、飛瀑に打たる、荒行を

始め、猛獸と闘ひ、雷雨を凌ぐことが心身を鍊ることに利用された。末世の僧侶が聞くだけでも戰慄するほどのことを實踐躬行したので、信仰を一般に博したのも無理はない。彼等の山中生活は仙人の如く身體を枯らし其の動作を鳥の如く軽くしたので、天狗の俗説を生ずるに至つた。彼等は剛健である上に武装もした、これは戰國時代の僧兵を思ひ出さしめるが、山中に野宿し猛獸を防ぐには斯る武装も必要であつた。此の心身共に超人に近かいものが山野跋涉を事としたので左なくば後世までも拓けずに残つたであらうものが拓けた、これを思ふと今日登山を遊戯としてゐるものは、先輩の勞苦に思ひ到り、修験者の爲めに盛んな祭典を行ふことがあつてもよいと思ふ、未だ斯る企てを聞かないから、私は之を提唱する。

喜怒を鐘に托す

私は鐘聲に趣味を感じて聊か書いたこともあるが、西洋の鐘で興味のあることがないかと、考へてゐる内、モーパッサンの短篇小説を讀んで、僅かに一つを得た。佛蘭西が填軍の爲め敗れ、或る地點が敵の爲めに占領されて、その地にある佛國の教會の禮拜堂が鐘を鳴さなくなつた。それが不便でもあるので、占領軍が種々鐘を鳴らせと交渉したが何んとしても應じなかつた。然る

に占領軍の士官が、徒然を慰める爲めある夜佛の娼婦數名を召して酒宴を斡旋させた時一人の士官が粗暴の言動をなしたことが娼婦の激憤心を鼓舞して士官が刺殺され、其の娼婦は遁れて身を教會に隠したが、占領軍は怒つて百方搜索したけれども、其女を捕へ得なかつた。扱て刺された士官の遺骸を教會で葬るにつき、若し此場合に於ても教會が鐘を鳴らすことを拒むに於ては、それを理由として禮拜堂を破壊すべしと内々意を決して葬儀を營むと、教會では注文を待たず盛んに鐘を打鳴らしたと云ふのが此短篇小説の筋である。面白い筋と云ふでもないが、彈壓下にあつて悶々の情に堪へない佛蘭西僧が、鐘を藉りて喜怒の情を漏した所に興味がある。即ち前に鐘を鳴さなかつたのは憤怒の表徴で後に鳴らしたのは敵の不幸を慶んだのであるが、私は此の皮肉の脚色を面白く感じた。因みに遁れた娼婦は鐘樓の中に潜み、亂平らぎ無事で舊處に歸つたが、此の愛國行爲が評判となつて或る愛國者の妻となつたと云ふ。

柳北翁の碑に對して

伊豆の熱海には種々の記念碑が建つてゐるが、成嶋柳北翁を紀念する何物もない。實は熱海の蒙昧期に好んで彼地に遊び、其都度新聞や雜誌に此地の風光美や温泉美を宣傳した人は翁其人で、熱海開創の第一の

恩人は此人であるのに、今は全く忘れられてゐる。翁が熱海に遊ぶ毎に宿つた旅舎は今の聚樂で、其頃は前代の樋口屋であつた。自分も長い間此旅舎が定宿であるので時々翁を憶ひ出し、或る時坪内逍遙氏と話次柳北の爲め切めて此の旅舎の庭内に一小碑を建て、柳北を紀念してはと目論んだこともあつた。それは十數年前のことであつたが、昨年逍遙君が重患に罹つてゐた際、偶然吾等同人が十數人聚樂に會し、席上私から一同の賛成を得て建碑を發起すると、最も喜んだのは聚樂の主人で、聚樂が何れもか擔當して工事はズン／＼進み、茲に建碑の功を竣つたのは、昨年十二月で、吾等發起人は三月廿二日除幕の式に臨んだ。碑は逍遙君と嘗て語り合つた案に基づき、碑の上部に翁の面貌を刻し、其下に拙筆で「成嶋柳北翁」の五字を署し、背面には翁の熱海の詠歌を刻した。出來て見れば案外堂々たる趣があり、聚樂の庭内に一風致を添へた。私は除幕の當日同人と共に碑を獻じて坐るに感懐に堪へず、これまで嘗つて考へたこともないことをフト考へて同人に語つたのは隨筆家としての柳北翁であつた。翁は才筆を以つて當時に鳴つたが、明治初年に於ける隨筆家は何んと云ふても此人を第一に推さざるを得ない。當時大新聞の間に伍して朝野新聞を重からしめたものは、未

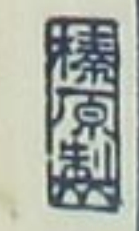
廣鐵腸の社論よりも翁の毎日の短篇漫筆であつた。あの人は硬軟あらゆる文體をよくし、滑稽の間に諷刺を寓して常に世を警醒したので、柳北の戯文は一世を風靡する概があつた。翁の著述は曰く柳橋新誌、曰く京猫一斑、共に漢文體の戯文で吾等は漫然當時之れを愛讀したが、實は皆隨筆に外ならない。翁が毎日新聞に書いた漫言も隨筆であるし、人の爲めに書いた多くの文も亦隨筆とすべきものである。そして尤も隨筆の體を備へた大部のものは花月新誌で、これは雜誌として刊行されたものだが、翁の詩でも和歌でも紀行でも翁の交友の詩文でも皆これに収めてあつて、事實翁の隨筆と見るべきものである。當時堅くるしい漢文系の文章家はいろ／＼あつたが、艶麗にして而かも氣品を保ち、大衆に投ずる文章はと云へば翁が專賣であつた。翁は確かに明治初期の第一の隨筆家であつたことを今シミ／＼と感ずる。自分などは、翁に私淑して隨筆を書き出したのでは萬々ないのだが氣が付いて見ると、翁は隨筆家としても吾等の先輩で、あらゆる點に於て翁に及ばないことを愧ぢざるを得ないと云ふのが當日碑に對しての私の所感であつた。此碑が成つて遺憾に思ふたのは、折角逍遙君の案に従つて出來た此碑を君が見ることもなく鬼藉に入つたことである。

○川柳を讀むか上の者一と尋ねるも一思ひ、自今
の如くそのまゝか或許もさう多く、東に蝦山の運命
と共に進む儘、川柳の如く、いふ如く、食糧、
のありは所が昔し有るも、菜菜も居り、
まふがあらば、今の「尸」が牛肉屋の「世界」と變つた、
鋸は自今も入つた、こゝかあるが、
大砲を此家の二階より上げて撃つた、
次既「尸」が川柳も、此の「尸」の附、
居があらば、川柳も、
かどうか、料理の各々、
へ、自今も、
んがあらば、



蕎麦屋の今も昔も、十三居の極、
の端に、
の二十三居、
か二十三居の、
渡田屋と、
あつた、
まいか川柳、
れ、
今、
二佛店、
娼婦が、
自分も、

下山とよむ徳り代々火除地としてゆけてありけ所は
こゝか見せ物其他●飲茶店をも設けんと云ふん
ぬ、池の端より香葉茶屋が三軒ありけと云ふ、こゝに
ハウスこそまふべきものだが、その酒代は酒悦酒好子
との層非のあつても一帯は、勸茶屋の然らば物産
といつてあり且の四五の川橋を備へ、橋はれれも重ぬ
三つあり、不忠池の岸尾の西側にあつた茶屋もあつて
この公其の川橋七前、次はかくこゝまゝの殿なる。花園
橋あり穴橋ありと云ふれ、大地穴橋段段も五派と云つ
た、地形の穴のことと云ふも昔し出合茶屋く出さけ
女がこゝを待合のれりといふ川柳が残りてあり、狩谷橋
の文家茶室と云ふ本屋、仲町と云ふの茶室、こゝのれ



今、こゝをめぐりても、下谷町は、
とよふが、あつた川柳むつた、人々川柳七やのれ、
川柳橋の隈え、此家れと云へた、戊辰の乱に
の跡痕とのこゝに、黒門、自合のゆかり、出さ
まゝ、残りてあつた、今、移して、新義隊の遺
葬、一、南千住の町、円通寺に、保良、と云ふ
つた、上空のち、昔、石段の銅像のあつた、こゝ
台、割草店、あつた、こゝ、橋を、と云ふ、地
まゝ、聖堂や、勸茶室、此、こゝ、あつた、こゝ、
大岩頭、の、尾、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
二、移、こゝ、の、昔、花、時、の、民、衆、の、観、橋、の、山
こゝのれ、河、原、が、あつた、時、刻、か、ま、ま、と、皆、あつた、出、さ、け

運命の旗幟の旗手はあつたが、魚鳥を捕まへ、その志を
いふに、もいふ。三橋の中央を狩野、瑞成らの
いづれも、人々や異式、東西の橋、限つて、
とんぼと云ふ。

○昨今、銀座、街野を改築すも、商店のしきり、
ンドーに洋畫の額面が飾つてある。この窓も飾つ
てある。気がつく。文長、友方の洋畫家が、
の商店の後援を得て、銀座をサロンとして、展覧
してある。よと合つた。こんの如きもの、
い思ひのき、思ふ。しきり、
も、
の、



湯で、観覧が出来ると、
文長の、
黙が、
リ、
大、
高、
冬、
り、
て、
○、
先、
換、

どの何よりか、所在斯の難法を申當る向のれよか
 叔仲あるとよか、此の道理を此の所より一軍
 闘い或人と辨疏、困り多き事、此の如
 乱事件の外、四より及、此の如き、此の如
 境界より四の動き、此の如き、此の如
 日者の乗すへき、此の如き、此の如
 通に、此の如き、此の如き、此の如
 せん、此の如き、此の如き、此の如
 公、此の如き、此の如き、此の如
 堂、此の如き、此の如き、此の如
 寺、此の如き、此の如き、此の如

東京朝

東京朝日新聞



三井家所有「如庵」福岡市神谷氏
 所有「湛浩庵」の二茶室があげら
 れて、これを第一着手として國寶建
 造物法及び重要美術建造物法によ
 つて保存網を擴大し、由緒ある古
 茶室はどしどし指定する方針を確
 定した、今度第一に指定された三
 井家「如庵」は京都建仁寺正傳院に
 元和年間織田信長の弟、長益有樂
 齋の手によつて建築され、歴々の
 に唐を張つたことから「唐唐」と
 も呼ばれてゐるもので、明治の末
 三井家の手に入り、同家では歴石
 しつこくまで掘り返し完全に移
 したものである、また福岡市「湛
 浩庵」は博多の宗津の舊居跡付近

にあり天正十五年に宗津が建築し
 たものである、文部省の柴沼保存
 課長は語る
 何しろ茶室はあの通り小さいも
 ので、寺院などちがつて簡單
 に持運び出来るので、出来るだ
 け調査をして保存してゆきたい
 外人などは日本に來て茶室の雅
 趣に非常に感心してゐるので、
 日本から持ち出されぬうちに調
 査の手を廣めていゝものは國寶
 に、それに準ずるものは重要美
 術建造物で指定してゆきたい、
 まだ海外に一つも流出してゐな
 いから堅め防止しようといふわ
 けだ
 また保存課副課長大岡工學士は語る
 寺院の茶室は大部保存法によつ
 て指定されてゐるが、個人の所
 有のもので單獨に茶室のみを國

最近來朝する觀客外人等は日本の風俗と共にのさびた茶室の
 風雅な建築に興味を持ち「茶室造り」は外人間の流行趣味とな
 つて來てゐる傾向に對し、文部省では茶室は容易に運搬の出來
 るものであるところから海外流出を恐れこの防止策に乗り出し
 た—茶室はこれまで龍興寺、東求堂、大徳寺、孤蓬庵、西芳寺
 湘南亭など有名な寺に屬するものは國寶建造物に指定されてゐ
 るが、個人所有のものでは全くそれがなかつたので、茶室調査
 の手を廣めた結果、今度個人所有の茶室が始めて國寶建造物に
 指定されることになつた【臺灣は三井家の茶室(如庵)】
 が盛んになり、足利時代になつ
 て茶室が出來た、これも陸の亭
 が發達したものが書院作りの一
 部の茶室が發達したものか、建
 築歴史としては明瞭となつてゐ
 ないが、ともかく日本建築とし
 て獨特のものである

○慢心を人の悪徳。西洋の諺にも慢の花の悪魔の
 庭に咲くことわざがある。此れを以て全体慢心の利巧ある
 物無し。慢心のよみ大抵其人の為物馬鹿と罵る。回
 根と生ずるといふが如く、こまに見合ひある。或は云く自慢
 言慢の馬鹿の行。飛ぶに展開のいやがる。慢は自慢が
 劣るべくして死滅に迫る。慢の羽が生くると其の姿は
 傲慢さきだが、弱さきく死ぬる。老あつたれば、自
 から矜る者故に長ずと、矜ることある。進歩の遅い。昔し
 から慢心が戒められてゐるが、富の自家の慢心を自から知
 る人の少ない。目も慢心で人を指さす人が印つて行く
 人の慢心を戒めたりする。西洋の諺も自家心中の慢心を
 とらふ。時夜黒地の上を走る蟻を又つらう難いと云ふ。

漢書

が、空をこぼす

○或は自祝の意味。或は他を祝する意味。贈答が行
 はれてゐるが、他人の意に投ずる物を送ふことが、実益に於て
 困難である。自祝の意は、人に物を贈るよりも、或は
 先方の意に投ずることと、一と云へば、勝手な物を極
 めるから折角の好意と云ひらるる。頂戴しても言葉は
 難いと思ふもの。よみ無に、殊に自祝を、場合こそ、今社
 会高貴人の何等、うの折に記念の記念とあるを、宣傳の
 副作用が、何れか、今、社の記録が、副産品、高貴の
 高標を、か附着するもの。彼れは相商の物を、この者の
 一人前、出せきのこととする。漸くこのやうなことを、
 花散のやうなものと、香台の細字を、社名を、刺す。

家へ零落すべし或許生計のふかりをさしあてりて
平生の無用のものもいざとさると、嫁つて人の芳志が
すゝめえ金もさることさふやむとあるが、嫁り物に
くつろぐぬ、故大隈熊子刀自から貯りんと二十回金
貸す所の最上の賃位がありともよく得よう、一時
と寄る集めれば際或る動機が新米の必要を万
買ひ集めればことある。こん等、他をいふと、
の序々こゝろをきき添くこと
の自分、曾て知らぬ子不知り、踏を踏し、
二里と二里所を全部経るつて、此難家日三
家村のたつことと、いふらん、今相馬河合の



人生け跡と後人かえり、田園雜具のゆゑ、
私が知らぬ嶮谷と歩いた度、いづれも最
印象と出づる、いづれも嶮谷と道、
と、その途、僅か三戸にけし、
律さるや、部を、
の部、嶮谷と呼ぶ、
けえれば、嶮谷の、
嶮谷との中間、
沼、いづれ、
え、いづれ、
か、いづれ、
あ、いづれ、

ことである。口碑を伝へ、此女をうへる者、こゝをある旅人
を殺して所持るを奪ふのを生業としておれ怖ろしい山賊
か住居しておれといふことにある。そんなまの残忍る所
業にのつての身慥いするやうに旅七或つとさうして
侍くこゝである。

個極る三家村が今あるありてあるのい空守る不思儀である
跡に其の村を巡りさうして主守つてしるし打人と
今元いさうといふことあるが、此村の存在の確り
ある。此の三家村にいたる時、うつろく着飾つた女を
殺して、まゝの所持るを捨てて、まゝが自分の娘に
息をのく、夢の如きまゝにしておれといふのであるのか、帰て
きたら途中にやうあることか知らん、流石残るの、思ふ入ぬ



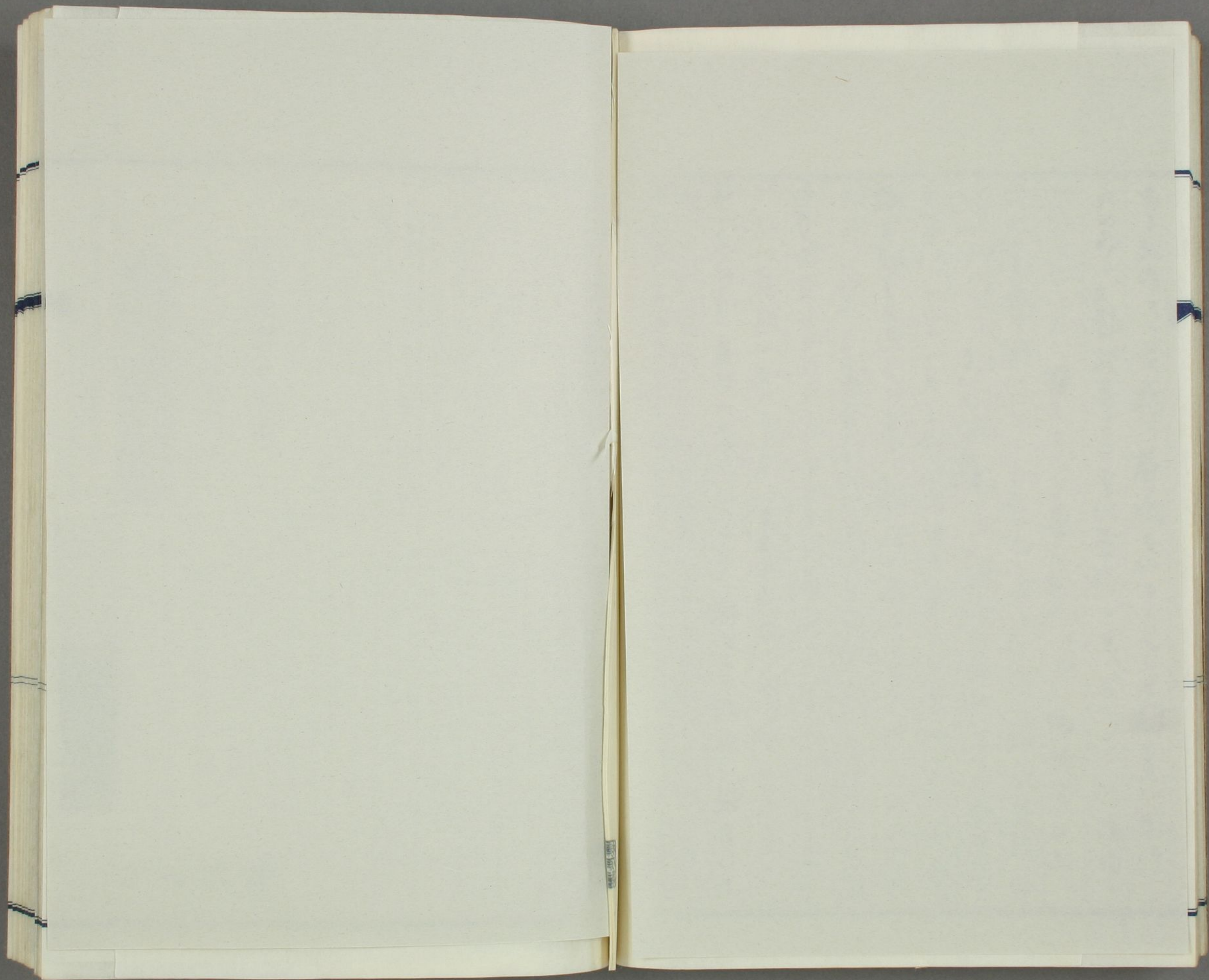
まゝから若心して泣き出た礼の儀、上のれとさういふことか今
七侍つてあることである。

○親極かして皇徳を教ふる弘福寺の境内に入つて見ると、
北附の淡路橋と女子の墓の山と屋敷があつた。此の
が今、跡方さういふ。寒月の花と流るる外に作つたと傳へる
爺娘の石像、今西寺の門の移さへ、石道の割みと納め
らるるおれ。こんな外に父母の像、数々の自他と交へたこと
かある。まづ、まづいさういふ、咳止めの子と標榜してある。昔か
まゝの侍説かあるのか、自今、世のを知つた。弘福寺の火
震災に焼けたか、今の再建、は柔とて主流さういふ
のが、七といふ寺前、目相高、餘地もある。これや、此の、皇徳
の橋を橋め、此の、境内か、あつた狭いのに、橋、いことか

あり、此寺の黄葉の善堂とやことごとくを、**○**と云ふが標榜と
 なるあり、**○**即程昔より高の寺格とあるれ、**○**境由、
 井伊家の墳墓がある。日或代の井伊が浦をせり
 多しうれば、此迄不似合の舟屋家、**○**華の善堂、
 つるるるを、一勢を喫り、境由、**○**松お目と云ふ、
 あり、**○**唯、一個名、**○**の盤が、**○**注を、**○**惹いた、**○**善
 通、**○**の盤、**○**おら、**○**形の極、**○**う、**○**を、**○**あ、**○**が、**○**こ、**○**の、**○**長
 方形、**○**長、**○**二、**○**三、**○**尺、**○**七、**○**寸、**○**幅、**○**一、**○**尺、**○**五、**○**寸、
 位、**○**入、**○**道、**○**き、**○**る、**○**の、**○**い、**○**ま、**○**を、**○**中、**○**の、**○**あ、**○**が、**○**港、**○**へ、**○**あ、**○**つ、**○**た、**○**何、**○**う、**○**謂、**○**ひ、**○**ん、**○**が、**○**あ
 り、**○**を、**○**う、**○**し、**○**見、**○**へ、**○**た、**○**が、**○**異、**○**状、**○**の、**○**あ、**○**盤、**○**也、**○**あり、**○**置、**○**き、**○**所、**○**の、**○**う、**○**つ、
 八、**○**面、**○**向、**○**う、**○**い、**○**ま、**○**の、**○**と、**○**云、**○**ひ、**○**た、
○堤、**○**上、**○**の、**○**松、**○**が、**○**と、**○**か、**○**り、**○**向、**○**ひ、**○**因、**○**り、**○**下、**○**う、**○**流、**○**解、**○**ゆ、**○**が、**○**あ、**○**は、**○**と、**○**解



待、**○**と、**○**し、**○**て、**○**流、**○**し、**○**守、**○**の、**○**位、**○**を、**○**又、**○**と、**○**は、**○**う、**○**の、**○**局、**○**を、**○**敷、**○**き、
 障、**○**り、**○**け、**○**ち、**○**あり、**○**焚、**○**燒、**○**の、**○**油、**○**が、**○**七、**○**寸、**○**の、**○**暖、**○**爐、**○**七、**○**張、**○**け、**○**け、**○**あ
 り、**○**唯、**○**に、**○**寝、**○**具、**○**は、**○**見、**○**へ、**○**る、**○**れ、**○**も、**○**分、**○**夜、**○**合、**○**い、**○**家、**○**に、**○**ゆ、**○**る、**○**の、**○**あ、**○**ら、**○**た、
○此、**○**日、**○**流、**○**守、**○**の、**○**生、**○**活、**○**を、**○**え、**○**て、**○**お、**○**も、**○**し、**○**り、**○**風、**○**の、**○**流、**○**ん、**○**を、**○**く、**○**木、**○**片
 を、**○**い、**○**ま、**○**し、**○**任、**○**け、**○**し、**○**長、**○**年、**○**を、**○**以、**○**つ、**○**を、**○**引、**○**き、**○**あ、**○**げ、**○**え、**○**を、
○日、**○**供、**○**し、**○**の、**○**こ、**○**と、**○**び、**○**果、**○**の、**○**流、**○**ん、**○**て、**○**く、**○**木、**○**片、**○**七、**○**寸、**○**の、
○日、**○**置、**○**い、**○**ま、**○**で、**○**え、**○**と、**○**拾、**○**ひ、**○**上、**○**げ、**○**ん、**○**日、**○**々、**○**の、**○**焚、**○**料、**○**に、**○**す、**○**を、
○鉄、**○**か、**○**め、**○**く、**○**く、**○**四、**○**合、**○**の、**○**任、**○**氏、**○**が、**○**田、**○**し、**○**こ、**○**と、**○**を、**○**せ、**○**つ、**○**を、
○の、**○**一、**○**端、**○**分、**○**味、**○**い、**○**ん、**○**て、**○**お、**○**せ、**○**ら、**○**く、**○**四、**○**月、**○**十、**○**一、**○**日、
 一、**○**端、**○**分、**○**味、**○**い、**○**ん、**○**て、**○**お、**○**せ、**○**ら、**○**く、**○**四、**○**月、**○**十、**○**一、**○**日、



信夫恕軒先生の寫眞

漢文漢詩の大家であつた信夫恕軒先生、本名は榮、別號天倪、明治四十三年十二月十一日、享年七十六で逝去された、長男淳平氏は法學博士で現に支那政府の顧問官に成つて居る、其淳平氏の三男清三郎氏より近頃恕軒先生の寫眞を貰つた、明治四十一年末の撮影である、其文藻の快朗であるに似ず、風貌極

めていかめしい遊面である

此恕軒先生が東京本所の龜澤町一丁目奇文欣賞塾といふのを開いて居た當時、明治十六年、門弟共が先生を主とした「塵新誌」といふ四六版の小冊雜誌を第四號まで發行した

其第三號に門人吉見某の奇文欣賞塾記を載せ、先生が生徒に對して奇文欣賞的に莊子の講義をする状を輕妙に詳述してある

當時の名家、中村敬宇、依田百川、小山春山、三島中洲等の漢文に「恕軒評」を加へ、又恕軒先生の天倪隨筆を連載する外、元弘石歌、泰西道德確言等の數章をも掲出してある



小野梓傳中の記念碑

富山房で發行した西村眞次氏著『小野梓傳』は、先年我明治文庫で材料を蒐集された緣故で、去日同店より其二部を寄贈された、故人の全貌を窺知すべき好著である、或人々は誤謬の多いものと評して居たが如何なるものでも瑕瑾は免れないのであるから、敢て咎むるには及ぶまいと思ふ

小野梓は明治八年共存同衆の創立者で『共存雜誌』を發行した人、其所論が多く載つて居り、明治十五年十月以來は隔日發行の『内外政黨事情』に關係して論文記行文を殆ど毎號掲出してある

予は右の『小野梓傳』を貰つて後、偶ま古新聞披開中明治十九年六月頃の諸新聞紙上に、小野梓氏の記念碑云々の廣告文が出て居るのを見、其發起人の連名などに感興を得、此記念碑の建設如何を同書に據つて調べて見ると、三一九頁以下に

建碑義捐金を集め、碑石を買入れて、中村敬宇に依頼した撰文を大内青巒に書かせ、宮龜年がこれを彫刻して、小野梓の郷里土佐宿毛に建てることにし、殘金で五姓田芳柳に描かせた肖像畫を東京専門學校に寄附した、碑文には明治二十年五月とある(碑文には大隈重信の篆額)

故人追慕の好記念物たる其碑石の寫眞も出て居る



が、其所論の剴切にして古い新聞紙の尊貴性を漏れなく道破したことに敬服する

廣告

小野梓氏の爲紀念碑

申合せ故に建設し其靈を慰めんとして同氏生前御懇親相蒙り候諸君の勿論同感の諸君子御資被成下候の本懐の至り御坐候

發起人

- 石上英天、大隈重信、岡田元吉、加藤元吉、丸田六郎、三浦三郎、島田三郎、尾崎行雄、林内崎、高田早苗、前田密、北島治房、末島重、廣地重、末島重、廣地重

あらう、西洋の建築家、今、東洋の建築家を
 相対研究を遂げ、公平の観察を下して、例へば
 近年日本に未だ建築技師、日本の建築として教
 服すべきもの、何れも、西洋の範に、伊勢大廟の歴
 史的日本國を、御堂作り、谷神社の古き並、各所
 の古建の遺物、茶室を、賞賛すべきものが少
 く、ついでと、西洋感心のもの、一切論するに足
 らない、とみる、此等と、ついで見れば、西洋建築家も、西洋
 建築の、相対の批評眼があり、と云ふを妨げない。其
 日光の建築、僅かに、あるが、十何年、と云ふ、後、今、
 當時二十年前を、費した、といふ、そんな、今の、金、よ、と、二千萬
 圓、有り、日本、の、海、世界、も、数、例、の、舞、の、美、大、の、書、金、を、扱



此、の、ま、で、も、ハ、る、或、十、何、年、と、云、ふ、記、撰、の、西洋、人、か、ら、見、る、と、玩
 具、の、進、歩、の、よ、い、ま、あ、る、と、云、ふ、が、果、し、て、洋、建、築、家、の、之、を、
 見、て、見、戲、す、と、思、ふ、と、一、蹴、し、ち、ま、い、る、と、云、ふ、と、
 自、合、の、保、野、未、だ、今、の、日本、美、術、の、関、心、も、亦、年、々、の、
 一、書、を、讀、ん、だ、内、に、米、國、の、レ、カ、ゴ、か、ら、日、光、建、築、家、を、研
 究、す、る、未、だ、某、技、師、(其、名、の、書、の、ゆ、え、と、な、る、の、)と、日、光、に
 於、て、對、話、の、著、記、が、ね、め、と、あ、る、を、讀、ん、だ、如、き、外
 人、の、日、光、觀、の、大、略、を、知、り、得、れ、今、右、の、之、を、抄、録、す、と、
 西洋、の、人、間、が、自、然、を、傷、付、け、替、り、金、の、一、筋、を、征、服、し、
 仕、業、は、さ、う、と、云、ふ、點、が、あ、る、と、僕、は、西洋、人、の、野、心、を、
 其、批、評、を、是、に、認、め、る、と、思、ふ、自、然、の、征、
 服、は、さ、う、と、云、ふ、文、の、と、り、あ、る、と、思、ふ、也、と、云、ふ、一、言、

文心の程が、自然に現るる尊敬の有無に律せぬか
らぬと思ふ。今日の日本、いかに、三千年前の
日本、文心四つあるに、その証拠、この日光に、あつたけ
れ、東照宮御廟の内の、注意の眼を放つて、御
坐すも、前より、あつた、深山に、毛杉が、茂つて、長ければ、
想像するに、難かぬ、其、茅の、木を、一本、く、間、あつ
た、藝術的、行、お、を、せ、ぬ、や、う、と、強、く、と、恐、怖、な、道、の、
い、細、心、の、研、究、を、拂、つ、て、え、外、に、此、家、の、殿、を、を、
速、く、見、察、し、冬、道、を、通、し、た、の、ひ、あ、る、冬、道、が、鈍
角、に、折、れ、な、う、と、却、て、神、意、此、地、を、後、改、す、の、
感、あ、る、と、ま、喜、ぶ、と、曰、時、ん、僕、の、こ、の、曲、つ、た、冬、道、の、
設計、者、妙、め、つ、た、く、の、尊、敬、を、せ、ら、れ、る、存、在、を、

樹木の位、ま、樹、つ、た、り、の、証、據、と、え、ら、れ、る、こ、と、が、あ、る、と、
と、思、ふ、又、境、内、の、均、斉、を、破、つ、て、ま、ち、ま、ち、と、大、き、く、
生長、を、し、樹、木、を、重、重、と、し、事、物、と、え、ら、れ、僕、の、
いつ、も、其、設計、者、の、抱、いた、自、然、崇、拝、の、偉、大、な、
て、あ、つ、た、こ、と、を、感、ぜ、ぬ、評、定、行、つ、た、ま、い、え、給、く、殿、を、
の、間、に、點、々、散、在、し、も、甚、だ、毛、杉、一、株、に、陽、の、つ、の、
前、に、ま、つ、た、の、大、き、な、杉、の、木、の、存、在、を、破、つ、て、殿、を、
ま、ち、ま、ち、と、茅、し、き、價、値、を、持、つ、て、あ、つ、た、ま、い、ふ、こ、と、
僕、の、評、定、を、ま、ち、ま、ち、と、評、定、し、と、無、責任、な、誇張、の、無、い、た、ん、
か、松、平、山、侯、の、弟、と、偉、人、の、家、傳、を、ふ、ん、む、こ、と、が、あ、
ま、ち、ま、ち、と、評、定、し、た、ん、が、彼、の、種、々、の、口、走、術、屋、の、杉、並、木、
の、壯、麗、な、價、値、に、出、合、つ、た、ま、い、え、給、く、殿、を、

奥いとこのことが出来たか。

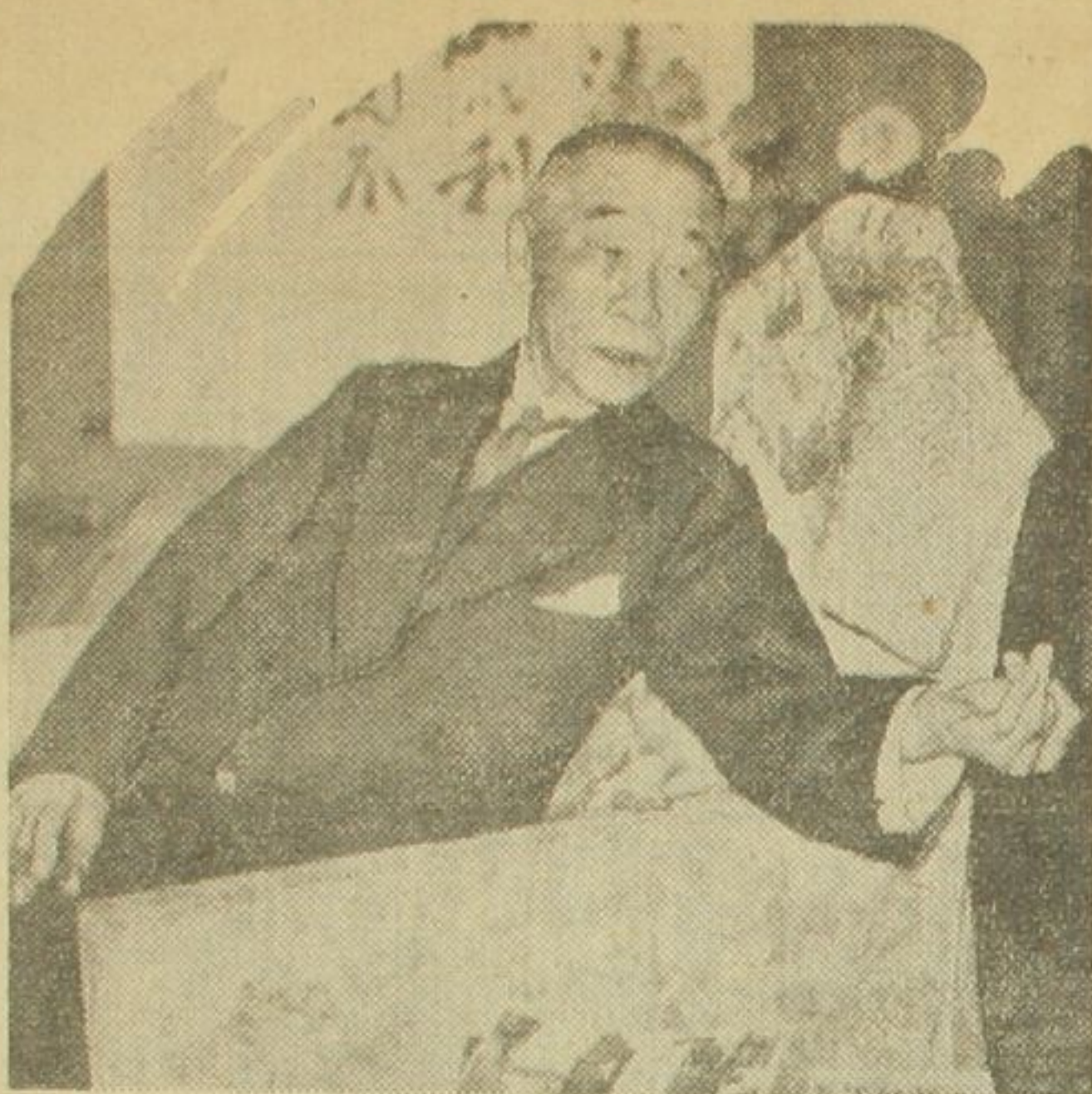
石のまわりの樹木を落美し比のひあるか、更なる道へ
て建、梁美と左のれを返してある

十年前を語る林男「カッツは現在の墨堤」

「藤引で吾輩の法科のコースは」と今から楽しみにしてゐる

でも
編の節
・ボ
・富日
記念式
つ慶華
面を授
ので五
た各學
今日、
マーク

第一回 B・O 林男爵



オール持つた手に
思ひ出も深い皺
歴史を飾る殊勳話

明治開化の昔から選定の華と謳はれた帝大のポ
ート・レースが始められてから今年は丁度五十
年目、今やオールドピクを目指して世界争覇を
意気込む折柄、明治二十年初夏、隅田川で我國最
初のポート・レースを行った東京帝大演習部で
は来る五月十六日(土)輝かしい五十周年記念
祝典を挙げると共に翌十七日(日)は半世紀の
歴史を飾る殊勳の歴史を飾る殊勳話を盛
大に行ふ事になった、奇しくも我國最古のポ
ート・マンとして第一回のレースに出場した選手
達の中で唯一人の現存者が桐野園官林権助男
爵だ、當年七十七歳の老男爵は十三日夜麻布
町の自邸で五十年前の「ポート・レース」の
生」の懐かしい思ひ出を左の如く語る【写真は五
十年前を語る林男爵は現在の墨堤】

〇とあるゆゑに乗り親極うまの家を出づ、先づ上野をめぐ
りて見、この極ハシ斗毎コ差微し、今ハ殆んど見入る
ず、平等か古生時代ニ親なる木ハ皆枯れ、まの頃のよりの
僅ニ動物園のみの数樹あるまじ、東台々ニ新築極の
名不と云ハ難いと感ハ、墨堤の極ハ何者も前親比外
他のまじ、一花ももてり、今ハ満開ハあり、一

明治

二十年、丁度林男
爵は二十七歳の元氣
な青年で東大法科(當時四ヶ年)
を卒業した。ポート・レ
ースを日本でもやらうかとい
う時、加藤嘉郎の氏以下幾重
博士等教授及び学生有志が協
力して寄附金を募り苦心成就
した。白ペンキ塗りのポート
四隻、早稲、工、文理聯合の
四學部に二隻宛り當て選手を
募集、日本最初の大レースを
目指して物々しい練習が始
まった。林男は當時練習十
四、小艇でもピリと辛
い。ポート魂から能手の重寶を
承り、勝れのレースに出る事
になった。

吾輩

は一番年長だった
ので選手一同の世
話を焼いたものだ、近頃では
コックスはたゞ身體の小さい目
方の軽いといふだけで選ばれる
が昔は六人の選手を統制する
のがコックスの大役だったよ、
なんとかして勝ち度いと思つて
人目をつかぬ干住大橋の付近で
猛練習したものだ、さて勝れの
當日だ、たしか卒業直前だから
七月頃かね、まだ電車がな
から本郷の寄居舎から向島まで
歩いたものだ、愈々吾輩橋の邊
から四葉並んでスタートしたが
藤引で吾輩の法科のコースは一

五十

年の昔、林男が第
一回の優勝マーク
を飾った。輝かしい優勝旗は今日、
最早布地に余す所なく勝つた各學
部のマークで埋め盡されたので五
十周年を記念に今回、數千圓を投
じて更に来る五十年間を保持、華
やかな新優勝旗を調製、勝れの記念式
席上で披露する事になった。當日
は林男も最古の「オールド・ポ
ート」としてオールドピク出場の時
大活躍した。吾輩は喜んで出陣するよ、でも
肩上げだけは御免だね
と今から楽しみにしてゐる。

このことを知れば此の五万人社以後の共済生命保険今此の最
身び自今七被傷人の一人に於て今佛廟配市の如き掛け
全八十一年前より免除せんをみるべし七この関係である。多
くの碑のあり著名な藝術家のといふべく見出しに中々著
吳江の豊碑七あり此印林を形とした細長の筒形の碑が
あり此碑は云々として上段に自家刻かあるを印人許其の
碑であることを知れば唐代弘法大師の刻に比ぶれば武基
と號したまは任檢神を尊しけらるるおのる見かあるも
たんとすると思つれば、夏平の去つて再訪を期し四月十
日(記)

○自今の大如き和歌や況句を愛する大隈先生の著

はきだめの巻の下より廿一頁まで子に教ふこと



つきとありけん

人の注表を授けし物主就て海に比とてり此作者の慧が
ありし而も倫理の至理を寓しをみるに賀の千代の
句に「きまきりし根根を倒す雲くまし」とん恩を伝し
返す日の去か宛々んとあるかれば見ゆるが生育の力
のたろく後生悲ぶべしとの意を由寓してあり日本の
道歌にありしに露を月と矢し歌人に思まんと此
の二首を讀み道歌も又ん教訓を寓しをみるに
みか多の自今に女にを喜ぶまはるに後を子に向ん毎
のむ紙あひあひあきん死ぬるいとあはれなま乱れ多
也界に祈り「うとうといて静かきるあまのほれ」とん
子息の形をとりての月照る家庭へるめ愛しし事

土俗に於て見らるる川柳子同く俗名を呼べる葉花
はありきや山王堂葉花のみうんや善道誰んども
口をくちこととうテン花はまぐは目撃を待つて終るる
傾聴する人地（てん）およも羅甸語をも使ふよあ
大馬鹿であることを知らざるか西洋も七羅甸語を
しる内へまゝの大馬鹿であるといふ（れん）ある我
群邦で先生と云つて程の馬鹿であるといふことば（れん）
漢語を作あかき先生は馬鹿だ

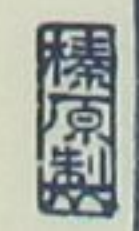
○西世界の観光客の年毎増加してあるが彼等が主
として見るものは我邦の名勝と云つてや富士山とか浅草
とか古美術（た）在在の古刹位は過ぎるべからず彼等が家
北海遊をたびたび遊歴する者も亦たその甚しき方らしい



實は観光客の観光日数の少くないものも速く北海道を
足と延びすことか出来ずいひのま彼等が北海道を見
のかす大原因である。勿論我邦人が宣伝せむべからず
七二原因はあつてけんも長く日本は足を踏めてみる外人
どうい限り北海道へ足を踏む人は少ないの心事は
るが私の特に北海道観光を北海道に遊んことを勧
誘せんとするのである。

此を四美なるものの四民の趣味も異なる口へきで日本我邦
人の趣味と異なるものも幾らありて地帯人の趣味は
好風好景とするものも異邦人の何等の感も異なるや
ふこともある。日本中の四季の別があつて四季
の俗を風物も多様があり、大自然の映像も異なる変化

があるが、邦人の之も天恵とてまじく異邦人の瘴
の程であるが、此處化より多い氣候が早くと異邦人のまじ
所にあるから、暑熱の甚き海濱の地から内陸の地まで或
日赤く暑い雨帯が降りてくる。中東の地帯或る地方
の雪の多い心もこの地にある。殊に日本の海中に屹とある島
國の地帯は、蒸暑の氣が盛んで、或る期はあつち
の濕氣が漲つて、人体も蒸さんて死かす釜中である
かごとく、日者氣も何んとも思はるる邦人の此の濕氣を
全一行の暑氣ある地へお流汗淋漓としてお休
をとるべく、邦人として斯くの如くおあるから、大陸の極寒
の地とてお休む感することおある。



の地帯を選ぶからとて、概して乾燥の地は、邦人の氣を
疎通のよい廣闊の地を選ぶ。又、邦人も凡そ東の美土に
てお休む者も、衛生本位にある。信州の軽井澤の如き
ハ全く外人の為り開拓せられたと云ふは、不だ、外人が好ん
で遊ぶ所は、夏時に入るると冬所もある外人が好む。集
まると、富士の裾野や箱根あたりに外人のまじり所は、地帯
不便な所は三々五々假設する似れ家も設けて住し
てゐる。實に日本人の眼から見たこと、お休む人もあるが
處のあるは、淋しい家、凡そ東の無の、狼をいかに出さ
ざるが、地帯とて、困難なる家も住むことお不審か
抱かす、程があるが、實に彼等の欲するところ、乾燥の空
氣、極暑の地帯、所々之を目前に住所を定め、梅

天の雨氣は外國人の最も少く乾燥の空氣のある處
は自然環境は大陸の風が吹くから牧草の生長が乏し
道程がある。我邦人が入る河川部は風量も少く
陰外に北極洋の氷が土地が漸やく注目を惹き如
何さま外人の喜ぶ土地は從來の日本風の風量も
地味も大抵の爪致のちるものも^{北極洋}も^{日本}も^大も^東も^をも^送も
きかると^直打つけようとする。日本十大風を^送も
刺すも^北極の^風量も^地の^二三^が中^{に入}る^北洋^の
ある。

日本本土は大陸的の土地に何れともなく北海道は吾等が切
り外人の探討を誘惑するの故故である。恐らく外人が
東北海岸を越へて上陸するに^北極の^故郷^を入^つる^の感

北極

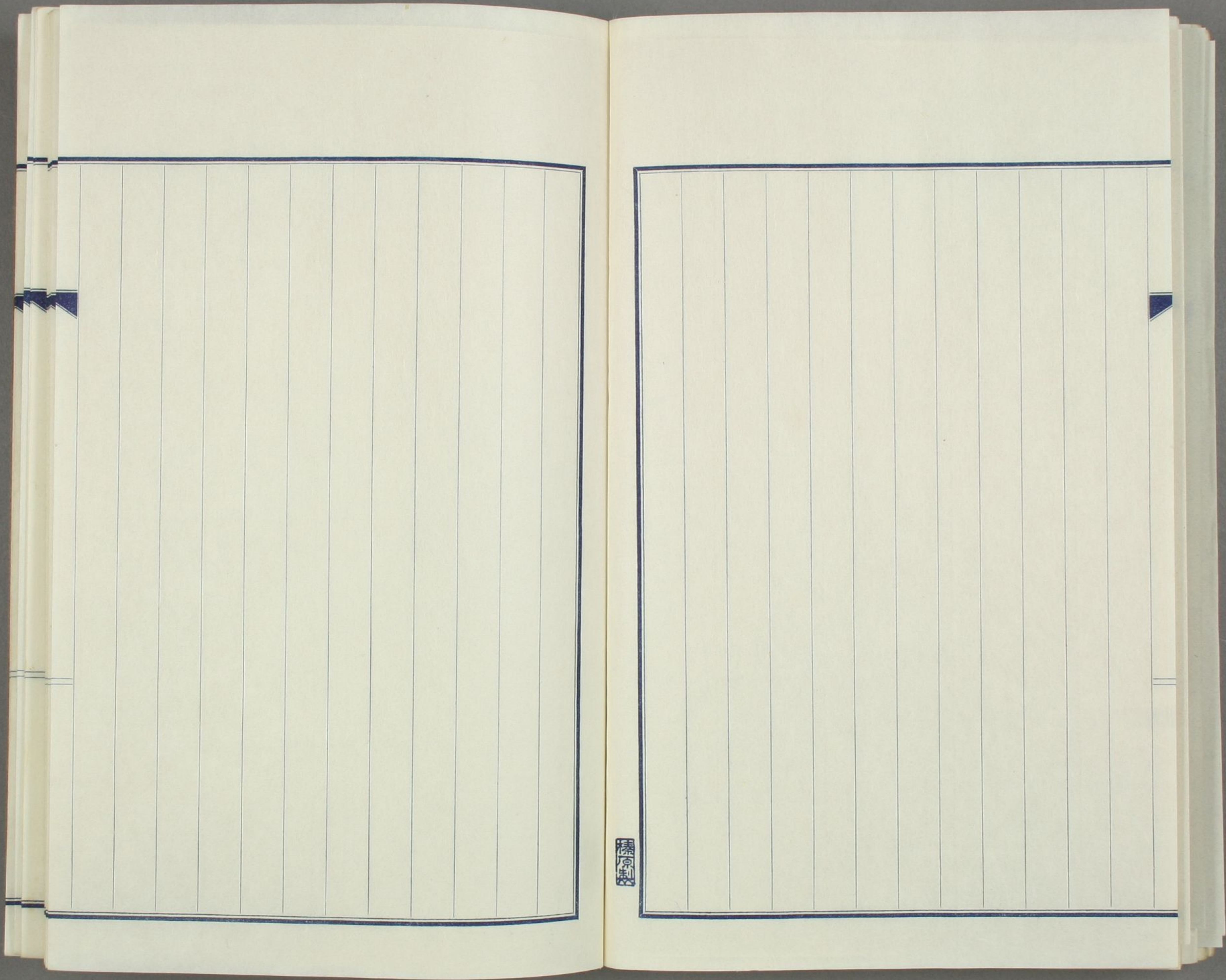
を受つるの北地は^北極^の海^を隔^つる^地に
が土地の形勢も^北極^の海^を隔^つる^地に
際限も^北極^の海^を隔^つる^地に
の山を^北極^の海^を隔^つる^地に
我邦人が^北極^の海^を隔^つる^地に
の枝を^北極^の海^を隔^つる^地に
と^北極^の海^を隔^つる^地に
かつく^北極^の海^を隔^つる^地に
植物も^北極^の海^を隔^つる^地に
北極の^北極^の海^を隔^つる^地に
頭寒足熱の^北極^の海^を隔^つる^地に
が^北極^の海^を隔^つる^地に

興味と風味といふは、海産の豊かさを中々、^味味と風味といふは、
有海と有山の鱈魚と昆布といふ、^味味と風味といふは、
一あるものがある。胃陰氣象、^味味と風味といふは、
興味と有る人、^味味と風味といふは、
知るもの、^味味と風味といふは、
川内川の豊饒的織巧の趣、^味味と風味といふは、
の雄大なる自然の列の更に展開し、外人を迎へてゐる。
北等快調、^味味と風味といふは、
近似的な、^味味と風味といふは、
か、^味味と風味といふは、
若端の調子である。

文の協会の英文雑誌「大日本」の北海各郡と出で

ん、^味味と風味といふは、
北海道(道)を、^味味と風味といふは、
ん、^味味と風味といふは、
(四月十日)

月指の後法は初めはゆるゆる



東京

以下
八丁
白紙

軍縮令議の脱退

軍縮令議に對し衆議院が感謝の決議を以てのりき然て
 ありしが全権は日本の主法を達し以て辭し去るべき所
 然使令の果さるるにつれ、^{此のまゝ主權を國持し}辭し去るべき所
 臣を非難し以て觀望すを考へると日本も可なり外交の
 近歩を見れば之を得らる。小村日露戦役し捷るる
 小村全権は何も戦利品を齎らして帰へらるるにあらぬ
 國民が驚き立ち小村も帰朝すると有ても殺さるゝ受懐
 びありはとも思はれず、今尚吾等の耳にあり



此のまゝ主權を國持し
 辭し去るべき所

とみるが、ちんらむとせよ、事柄を認識するに已むを得ず
 一りの増し日本が敗露は需の^いいんる事が起つた
 といふ、日本も度々切つてあり、私と傳へるからる
 四の内部も與今別のこととせり、並に多の暗いあつた
 から、よの漸時の媾和をやつたにせあるが、^{全権}外交使
 節に就けつらん役目む、事柄が通じ多のありと國民の
 憤怒や反感を蒙る事が往りありとある。日本が弱く
 して強國の頭の上をさりし當時、若くは外交官が何んつ
 らかつたか、今から考へると、真に後悔を堪くするに
 あり、今心の軍縮令議は、若くは井而全権が日本

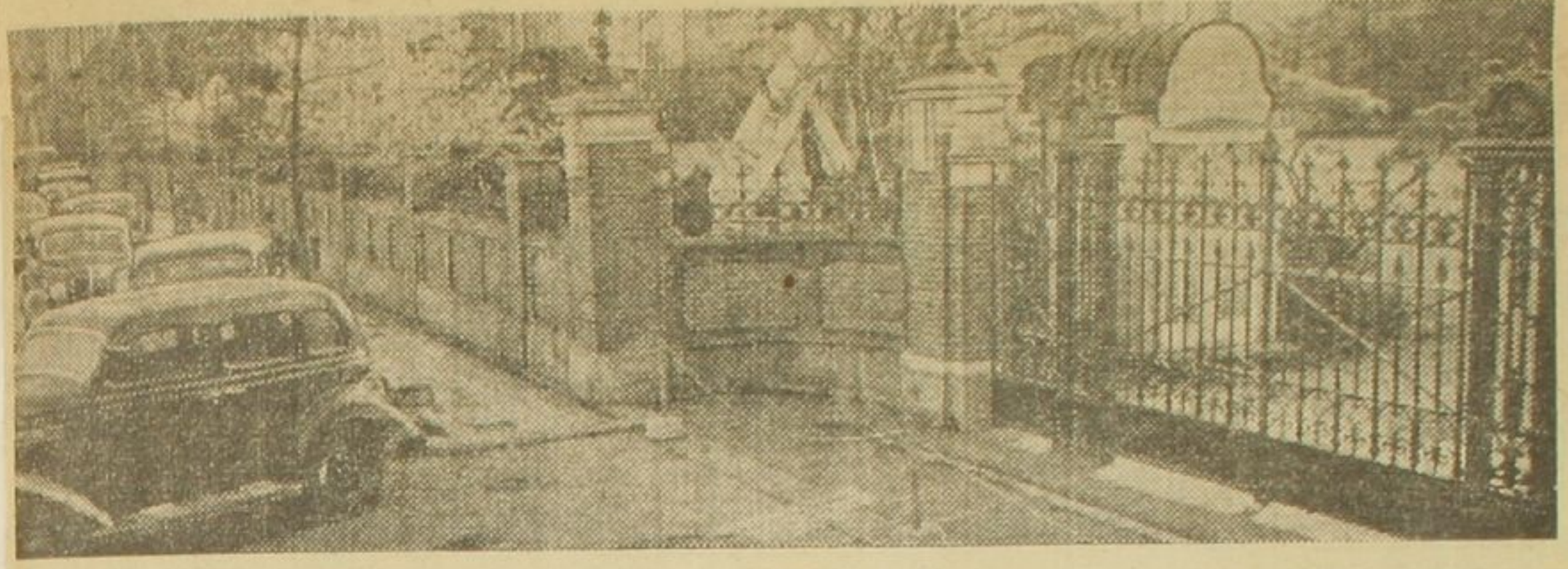
の立法を飽すは固守に比り、吾國權の爲めさ然の集
 事必敢て是れが外國に納められやうと期しこれのむき
 目的が違しうとも我國權の爲め戦い此が日多し
 必はるるぬ言は軍結の例は専門の事に属し一般
 國民にそとる並行のむ行意のそと全權に主權生とそ
 せることともうるが松岡全權の聯名脱休以来我國
 民七漸く其國際的主場を理解し七未だのむ衆激況
 の感謝の意然ひあり、世界に對し吾祝砲を鳴らせ
 やうとするむ者等、痛快を感ずる。本七久しい間
 不當の國際條約の下主つ比のことかあるぬ次以来條



約改正が執りし叫はん比當時を思ふと、吾等「軍縮
 條約」就この不當の牽制(スモ)同一不満の情を繰返
 さいるを得る。獨主國なる我邦が何故軍備を他
 國に制限せん必はるるんのか、之んを七忍び得るとす
 んんか、要う意味期(外國の利益を受けたい)の片務條約も忍び得るはるるか、
 本七意味期に推し進むを得むとす、今世界の六七
 比任し七勢力敢て他に譲らざる今日如何なるんか、膝を屈
 し七他國の制肘を多しけ不當の制限か止むんせらるべき
 ぞ、軍縮合流の脱退、即ち其拘束を差かす、
 國權の面目上まふべきは、脱退の效果、或
 ハ大四と競争(この競争)を過す、國民の境情、
 大切とちりて来れり、

を要する

くづ近“會議ラナヨサ”



青葉と共に別れる
あゝバラツクよ
名残り深し憲政發祥の地
あとに建つ記念碑

櫻が散つて、青葉が翳えて、五月一日は、憲法第六十九特別議會の召集日だ、廣田首相内閣が、その抱懐する強力政策を以て全國民に初お目見せんとするこの特別議會はまた、半世紀の憲政を育んだこの古いバラツク議會に最後の別れを告げる「サヨナラ議會」でもある、日本の憲政發祥の地、そして五十年の歴史に古びた櫻町内、幸町の二廓から議會はこれを最後の思ひ出に、愈引越して、永田町の新議事堂へ第一議會以來初めて「第一議事堂を清算するわけである」【室員は現議院の入口で、右は五十年の歴史を持つ鐘櫓】

議院 事務局では、建物に對する懷舊的お別れ気分の中にも新議員を迎へる準備に目下大忙だ、最後の赤電車議會ながら議席は既に新議員の新しい名札が懸然と並べられ、超非常時議會の治安を預かる守衛隊も十六日嚴重な神

充進致が済んで、この方の強力政策は既に實施済みだ、柔道道敷段といふ種者揃ひ百名の新組織である、金ピカの制服いかめしく、連日武道の猛訓練しながら待機の姿勢をとつてゐる、さて、三週間の特別議會終了後には、やがて取り

櫻しの運命に逢ふこの古ぼけた議院は、敷地八千坪、跡には、懸崖算一千萬圓を以て遷信省の**廳舎**が建設される事となつてをり、その後算は年度のサヨナラ議會に提出、引越した跡の後繼者をチャーンと議決してゆくわけ

だ、尤も、この敷地八千余坪をツクリ遷信省に譲すわけではなく、貴族院と衆議院と、二つ並んだ正門の部分を圓形に五百坪ばかり切り取つて、こゝに日本憲政發祥の跡を永久に止める記念碑を建設する事に、兩院事務局と大蔵省、實務局との間に話がまとまつた、バラツク議會は火災で建て替られたものだが、外部の**鐵柵**は第一議會以來のものがそのまゝ残つて居るので、この記念すべき柵で記念碑をとり巻くことになり、この鐵柵が、憲政五十年を語るつばものどもの夢の跡となるわけである

勘亭流の文字も美し 脚本『葉武列士』

浄瑠璃風に描く五幕物 假名垣翁の原本発見

スピア協會長兼大教授市河三喜博士や、
坪内先生に見
せたかつた
池田大伍氏談

相當古い本で兄が四、五年前に手に入れた時には署名もないので別に假名垣翁の著書とも知らずなるたきです、もうすこし早く知りましたら坪内先生にもお目にかけることが出来たらうに惜しいことをしました

日本シニクスピア協會の第七回シニクスピア記念祭は来る廿五日早大で開演されるが、沙翁研究の好資料ともいふべき珍本『葉武列士倭錦繪』全通しの脚本がはじめて池田大伍氏の解説で河竹繁俊氏によつて明瞭される

沙翁といへば故坪内逍遙博士が書いた輝かしい金字塔だけのやうに考へられてゐたが、こゝに幕末から明治にかけて麗華の名を馳せた假名垣魯文翁が坪内博士よりさらにハムレットを講案したのでこの『葉武列士倭錦繪』である、この講案は

明治 十九年東京種入新に連載されたものといはれ、後日製本して公にする積りでもあつ

學士院恩賜賞 と院賞

十三日午後七時、帝國學士院總會で恩賜賞及び帝國學士院賞授與者が左の通り決定發表された
(恩賜賞)原語による台詞高砂族傳説集、台北帝大前教授小川尚義(帝國學士院賞)台詞高砂族系統所屬の研究、台北帝大文政學部教授移川子之藏(同)日本上代の甲冑、京都帝大考古学教室末永雅雄

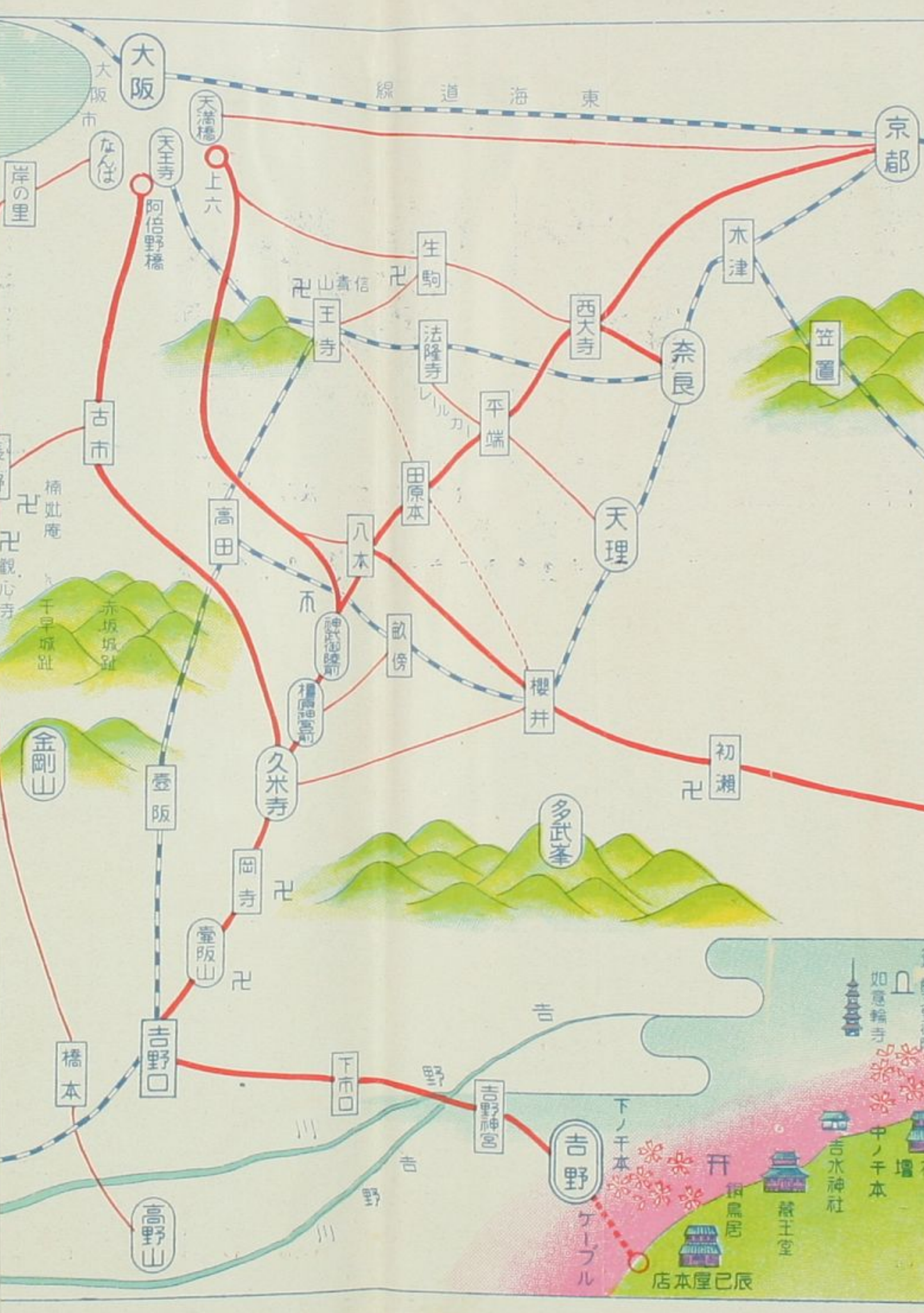
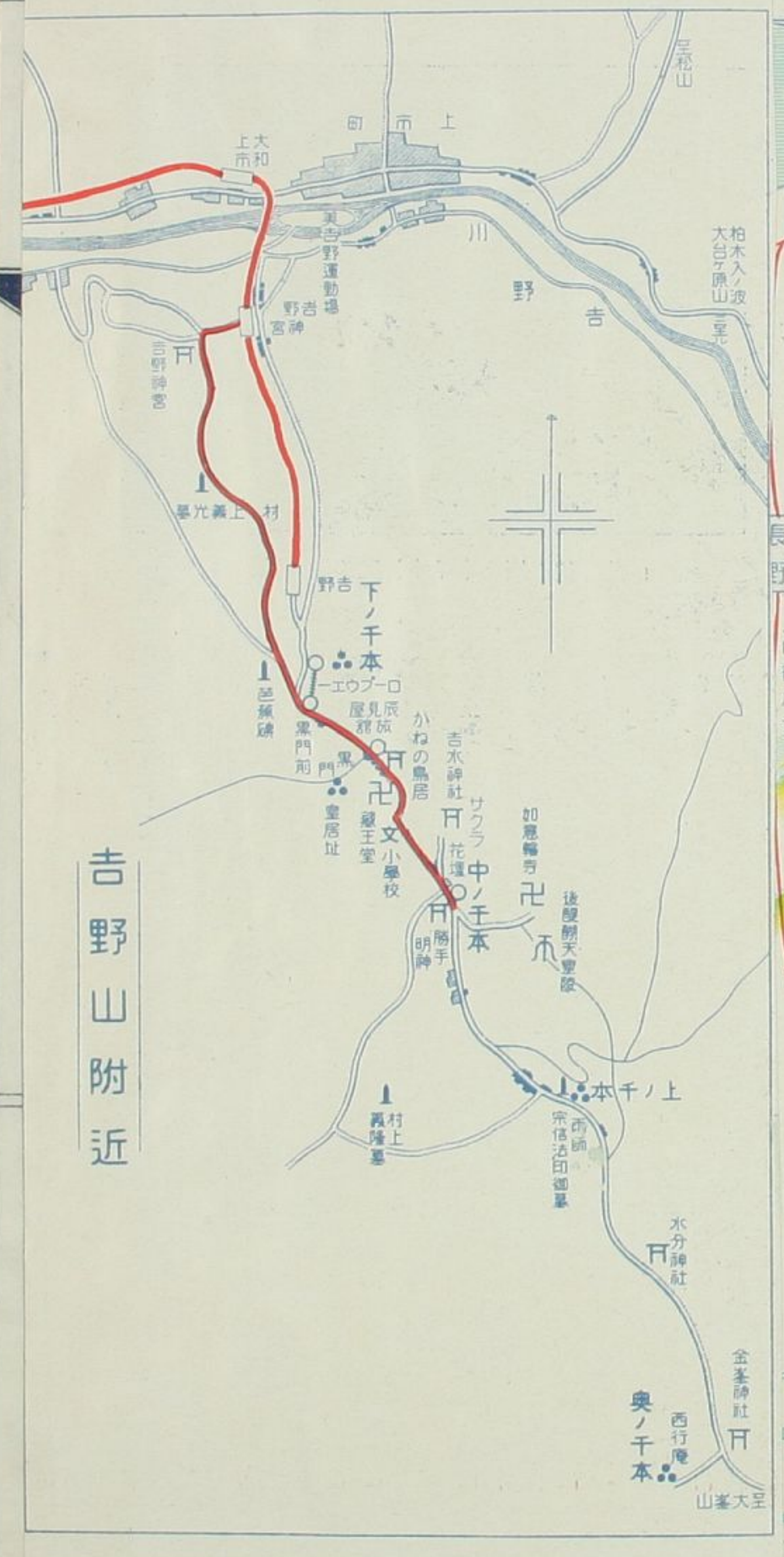
最近

實弟で劇作家池田大伍氏が見ても魯文翁が講案

したと傳へられてゐる脚本に似てゐるので、同氏はこれを明治文學研究家早大の柳田泉氏にみせると柳田氏が多年探索してゐた珍本に違ひないことがわかり、河竹氏の懇請もあつて今度の沙翁記念祭に紹介されることになり、シニクス

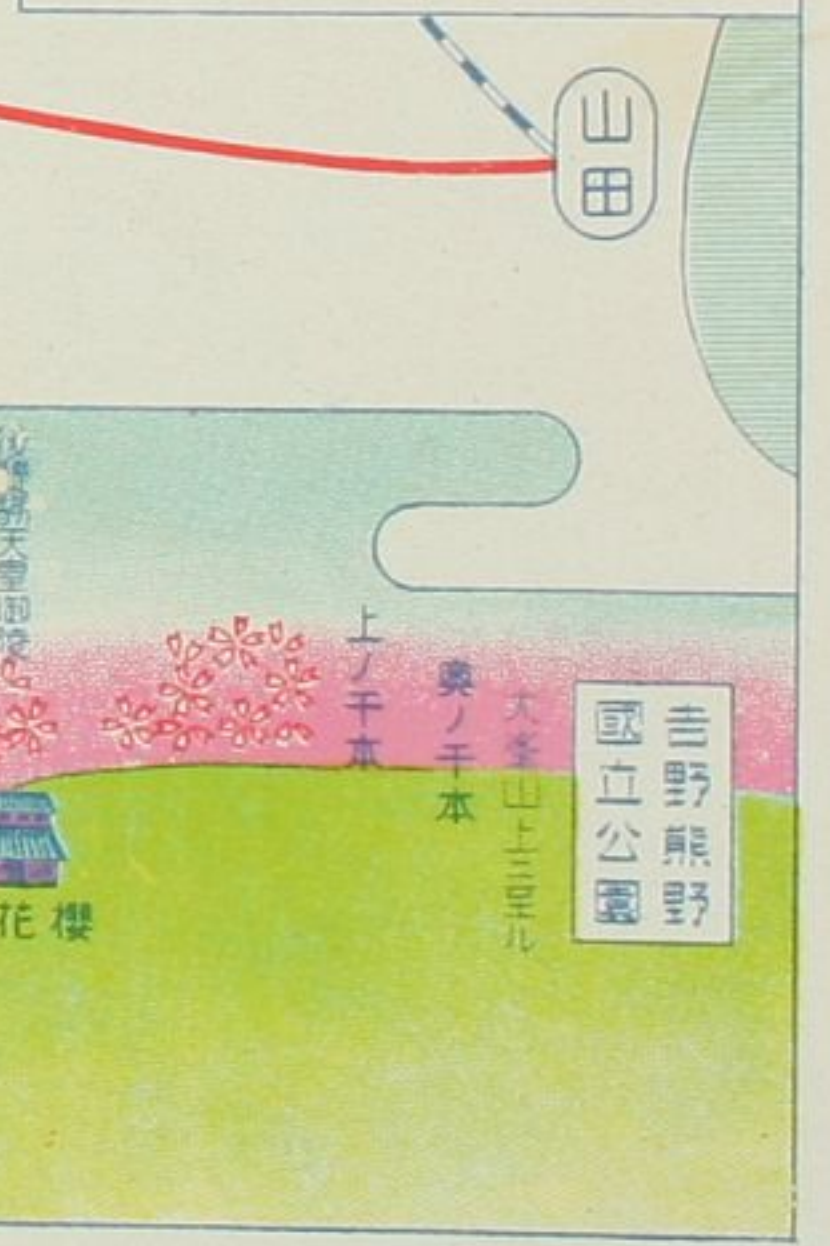
発見された『葉武列士倭錦繪』





表間時ト金貨

市名	電車	汽車
和歌山 (高野山)	大軌電車 久米寺 二二〇 一七八	大軌電車 吉野口 二二〇 一四六
京都	大軌電車 久米寺 二二〇 一七八	大軌電車 吉野口 二二〇 一四六
山田	大軌電車 久米寺 二二〇 一七八	大軌電車 吉野口 二二〇 一四六
奈良	大軌電車 久米寺 二二〇 一七八	大軌電車 吉野口 二二〇 一四六
大阪	大軌電車 久米寺 二二〇 一七八	大軌電車 吉野口 二二〇 一四六



吉野山附近

吉野公園

吉野ケーブル

